

2-1K46

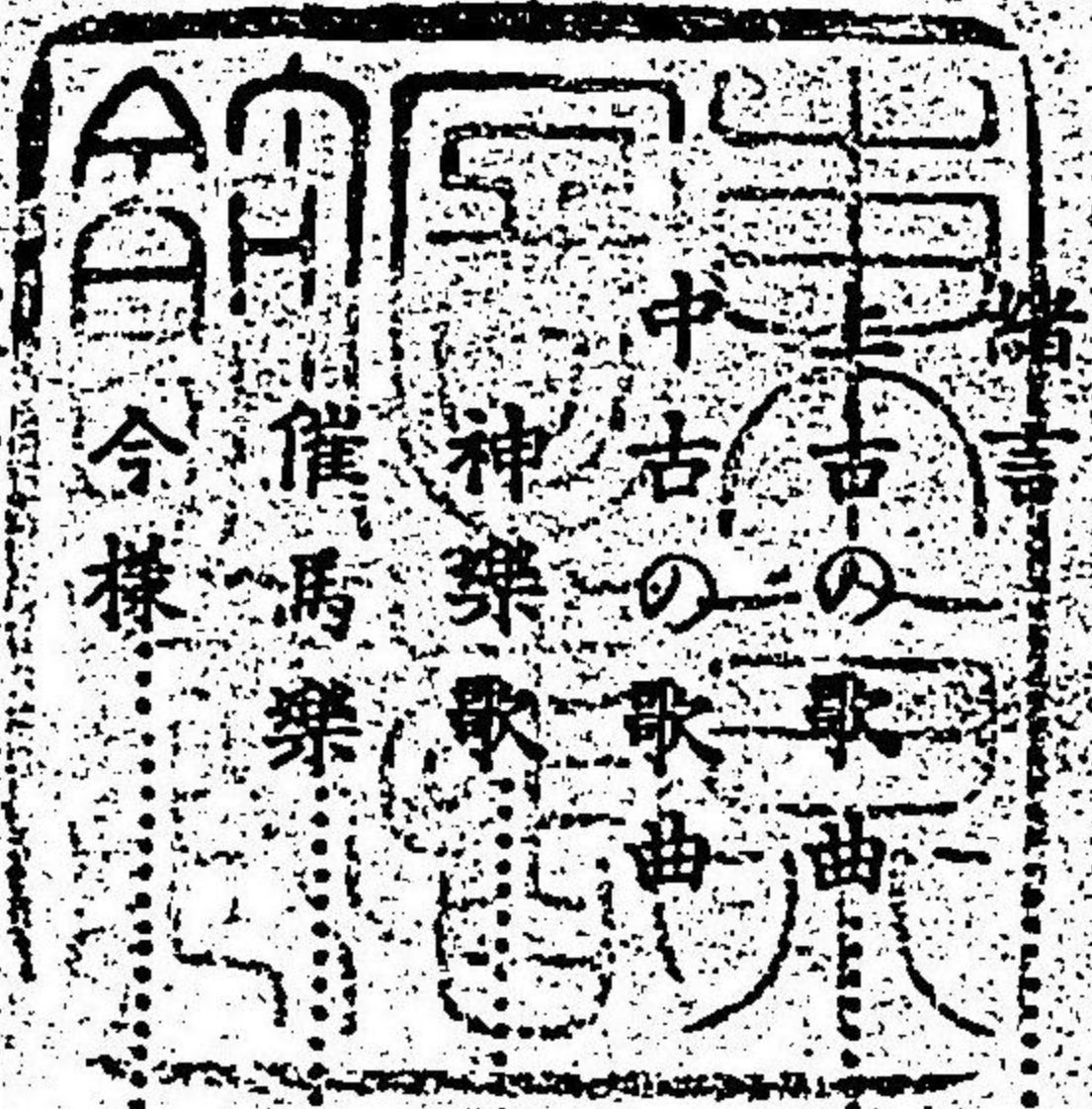
歌曲評註全

大和田 建樹 著

東京 博文館 藏版



歌曲評註目次



諸言	一
古今の歌曲	一
中古の歌曲	十一
神樂歌	二十
催馬樂	三十七
今様	五十七
近古の歌曲	
宴曲	五十五
謠曲	九十一
狂言小歌	百二十一

目次

一

盆踊唄……………百二十八丁

琴唄……………百三十七丁

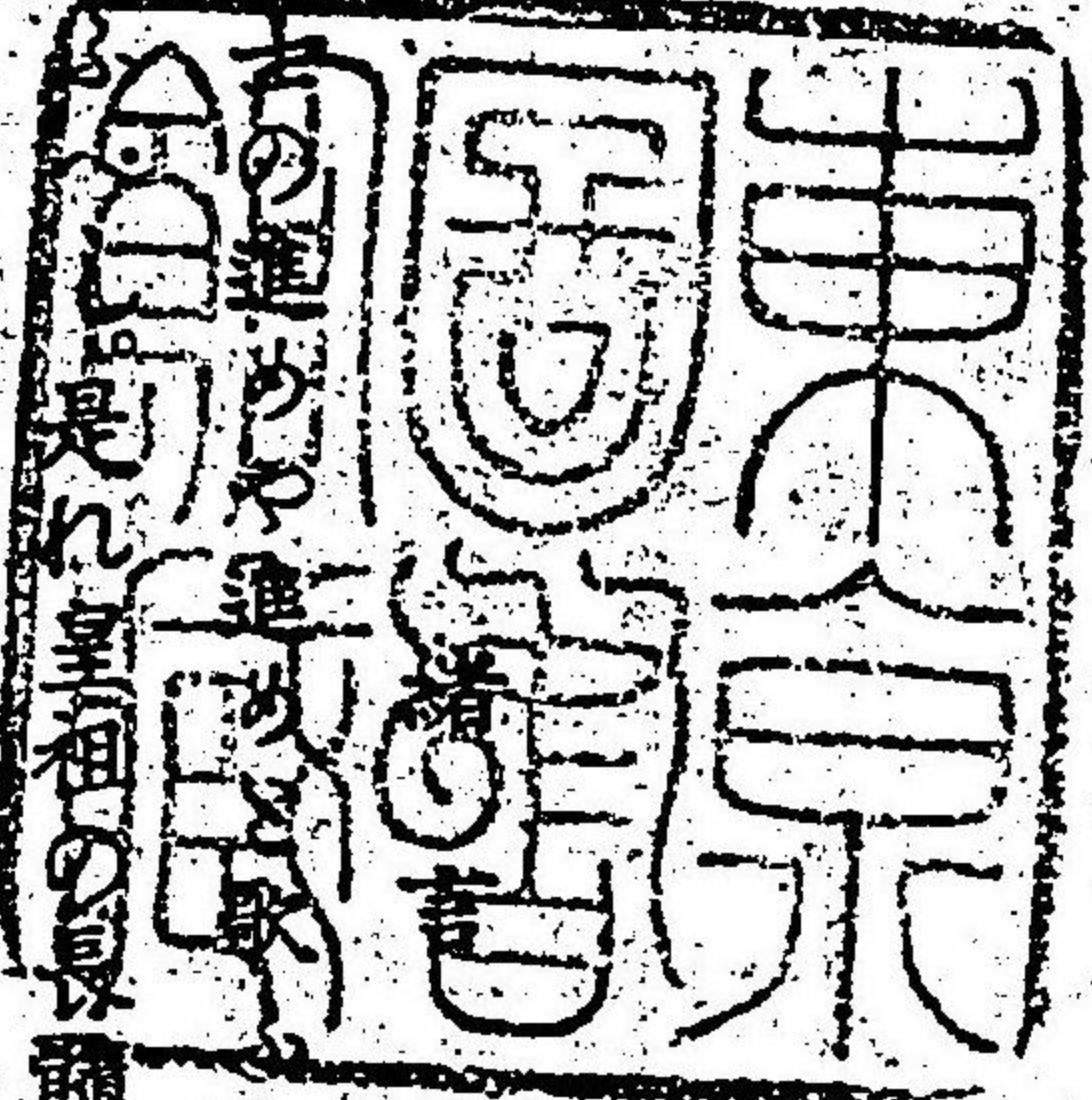
近世の歌曲

俗曲……………百四十三丁

俚謡……………百五十二丁

歌曲評註

大和田建樹 著



兵士の進めや進めを聞かば。懦夫も起つべく弱卒も戦はんとして氣まつ
 振る。是れ宰相の良議彦を討ち給ひし時の御製有る所以ふらすや。佛蘭西
 に「マルセーユ」の篇あり獨こに「ラインの守り」ある所以に非ずや。少女の「ひい
 ふつみいよ」と歌ふを聞かば。おのづから心春めき老爺老婆の氣も若やくに至
 るべし。是れ都鄙遠近の別ふく。手鞠歌の流行し泰平の聲を鳴らす所以にあ
 らすや。沖の鷗かと歌はざりせば。舟子は何によりてか月青く波黒き夜情を慰め
 ん。ぞん／＼太鼓と歌はざりせば。慈母は何によりてか鳩車引きつかれたる愛

兒を夢に送らん。歌うたふわざの人生に快樂を與へ無聊を救ふことの大きなは。此二三例に就きても知るを得べきなり。

そも〜此歌。すなはち歌曲といふものゝ。人毎に斯かる快樂を與へて愛嬌あるは何故ぞ。歌ひぶしの抑揚緩急が其原因を爲すことは疑ふべからざれども。今こゝに譜あつて歌詞ふき曲と。譜と歌詞と共に有る曲とを歌ひ試むることせんに。音樂の趣味を十分に解し得る人の外は。歌詞ある方を面白しと感ずるに相違ふかるべし。是れ我々同胞が先祖以來最も親密に共有し來れる國語の力。あづかつて大ふるものに非ざるを得んや。我々最も親密にして。實用と趣味とを併せ持てる國語は。面白き曲節を爲し抑揚緩急その度を得て愉快なる音調に歌はる。いよ〜心耳を満足せしめざる可からざればなり。

さて其歌曲の今日民間に行はれて。興味を與ふるものゝ種類を擧ぐれば。

第一種

神歌……………神社の祭典ふごに用ふるもの。

田植歌……………田植をする時に早乙女の歌ふもの。

麥搗歌……………農夫の麥つく時に歌ふもの。

稻こき歌……………稻を刈り取りて穂をこく時に歌ふもの。

碓ひき歌……………碓ひく時に歌ふもの。

茶摘歌……………宇治ふごにて茶摘をする時に歌ふもの。

草刈歌……………牧童の草刈る時に歌ふもの。

樵歌……………樵夫の山中にて歌ふもの。

漁歌……………漁夫の船中にて歌ふもの。

舟歌……………舟子の棹さす時に歌ふもの。

馬士歌……………馬方の馬牽く時に歌ふもの。

木やり……………家を建つる時に祝して歌ふもの。

糸線歌……賤の女の糸車くる時に歌ふもの。

子守歌……小兒を遊ばせ又は眠らする時に歌ふもの。

遊戯歌……小兒の遊び戯むるゝ時に歌ひたのしむもの。たとへば「お月

様いくつ」「螢こい」「蓮華の花ひらいた」「雪よこんこ」などの類。

以上は樂器を用ひずして歌ふ。

第二種

學校唱歌

讚美歌

軍歌

以上は多く西洋の樂器を用ひて歌ふ。

第三種

琴唄

俗曲……長唄端唄ト、一の類。

以上は琴三味線等の樂器を用ひて歌ふ。

ふどの類枚舉に暇あらず。中にも第一種は通俗にして自然の雅致あるを以てすぐれ。第二種は卑猥の分子を含まずして智識道德を兼ね得らるゝを以て長。第三種は稀に古雅存ぶべきものあれども。寧ろ卑猥無味にして上流士女の口に耳に上しがたきもの多し。今余は是等の内より殊に誦すべく味はふべきものを撰び。且つ其變遷し來りて是等今日の曲に至れる起原沿革を示し。之に賛賞すべく排撃すべき評を加へ。其解しにくゝ又は因つて來る處ある言葉には之が註を施して。以て世の嗜好者に紹介し。通俗文學辨勵の一方便たらしめんとするも。亦無用の事あらざるを信するなり。

さて其起原沿革を示すには。歌曲の實例に就きてするが本書の目的なれば。

本文を読みゆく内には遂に自然に會得せらるべき仕組ありとは雖も之を始めに略述して其筋道を一通り心得おかしめん事は。なほ地圖を調べ見て。山河の位置。道路の里程。などを腦裡に畫がきたる後。旅行せば利益大なるが如く。必ず欲くまじき道理なれば。いさゝか歌曲史の大要をこゝに語らん。

傳へ曰ふ。天照大神天の岩戸に籠らせ給ひし時。八百萬の神そこに集ひて天香山の竹を切りて横笛を吹し。弓六張を並べて琴を吹し。岩戸の前に神樂を奏して歌舞し給ひしと。斯くて遂に岩戸開けしければ。神々よろこびて同音に

あはれ あなおもしろ あなさやけ

と聲あけて歌ひ給へりと有ること。歌曲の起原ともいふべき出来事。否ふ寧ろ歌曲起原の時代を代表する傳説ともいふべきふれ即ち我感情を述べたる歌に我節を附けて。遠く求めざる簡單の樂器もて拍子を取りたる程の者にて。今日書生の宴に樽底を叩いて鼓を吹し。手を鳴らして太鼓に代ふる如き有様なりしを

想像すべし。之を神代より神武天皇を経て外國傳來の音樂を用ひざりし以前の歌曲とす。されば別に歌曲といふ一体の種類は有らずして。詠歌と異なる點なかりしなり。よりて自由歌曲時代とも名づくべし。

神功皇后三韓を征伐し給ひて。外交ひこたび開けし以來。三韓より支那より樂器樂人おひしに入朝し。我朝廷も之を用ひ給ひ。貴族社會に普く行はれしより。樂譜は定まりて精巧を極め。歌詞は之に束縛せられて十分に思想を述べたる能はざるが如く。且つ朝廷の式樂唱歌は一定不動のものとなりて。新作の自由を與へざりしかば。哀しいかふ多くの名作を此較して批評する程の材料に富まずして止みぬ。之を奈良の朝以後平安の京初期の歌曲とす。是れ神樂歌。篳馬樂の如く。一種の歌曲といふ体裁を成したる起原にして。支那音樂の樂器。すなはち横笛。箏。篳。箏。などのもの。固有國樂の樂器。すなはち横笛。和琴などのものを用ひて音律を助けしふり。よりて管絃歌曲時代とも名づくべし。

藤原氏衰へて平氏源氏つぎに政權を握れる頃より、世の中一變して民間の歌曲も貴族社會の寵を受くる事となり。白拍子の歌ふ今様などの曲一時に流行せり。次いで足利氏の頃に至り。宴曲。クセ舞。謠曲ふど次第に起りて武家の世界を取り圍みたり。之を保元平治の頃より徳川氏以前の歌曲とす。おのゝ趣を異にすも雖も。音律を助くる樂器ふくして。唯拍子のみを以て歌ふものなるは一なり。よりて拍子歌曲時代とも名づくべし。

徳川氏の初期より琴三味線の樂器に歌曲を合せ唄ふ事は、士人社會に謠曲の行はれつゝ有ると同時に。民間に向つて此俗曲を注射せしかば。無教育なる凡俗男女の嗜好に投じて其勢を逞しうせり。之を徳川時代民間の歌曲とす。樂器は前にいふ如く。糸を主として鼓。鼓子。横笛。尺八の類之を補助するものなり。よりて彈物歌曲時代とも名づくべし。

明治の今日に至りては種々の歌曲あらそひ起りて。各國に雄視する有様ふる

が。其普通教育と共に新流行を來し。至る處に之を聞かざるふきは謂はゆる唱歌なり。而して其樂器は多くオルガン。バイオリンなどを用ふれば。ふほ前例によりて西洋樂器時代とや名づくべき。而して其新奇に阿ねらず古辭に泥すまして。罪なく飾なき天然の聲を。人知らぬ處に反響させつゝ有るは。彼の俚謠の類ひより有るのみ。

そも、歌曲は。其時代々々の風俗人情の代表者なり。千載不滅の形を殘す言語の化石たるなり。之を過去に研究して其盛衰の跡を現在に鑑み。之を現在の模範として其得失の果を未來に省みざる可からず。今や人毎にいふ。風俗を改良すべきは歌曲に在り。余は更にいふ。愛國心を鼓舞すべきは國歌にあり。然れども國歌必しも堂々たる武人的もしくは貴族的のものを指すに非ず。又その風俗を改良するとは。必しも道德的修身的の歌を以てするの意には非らず。一篇の端唄ド、一。なほよく美育の目的を達して。知らず識らずの間に我々

同胞の國民を感化せしめん事。かの空也念佛の目的に出づる如くならん事を期するなり。讀者諸君よ。歌ふべし作るべし。俗曲もどより卑猥なるものにあらず。雅曲もどより迂遠なるものにあらず。唯一致協力して。以て明治言語の化石ともいはるべきものゝ出づるあらば。帝に歌曲史中の燈臺たるのみならず。亦我國文學史中の光明たるべきなり。



(一) 上古の歌曲

(神代より奈良朝の頃までのものを撰ぶ。謂はる自由歌曲時代)

おさかの

おさかの。おほむろやに。ひとさには。きいりをり。ひとさには。いりをりとも。みつ。くめのこが。くぶつ。い。いしつ。いもち。うちて。しまむ。みつ。くめのこらが。くぶつ。い。いしつ。いもち。いまうたは。よらし。

神武天皇八十梟帥を討ち給はんとして。先づ之をたばかりよせ。偽りて饗し給ひし時。其配膳の人々に。歌を聞かば之を合圖に劔を抜けて。道臣命の吟せし歌なり。○おさか……大和城上郡にて梟帥の住みたる處。○おほむろや……大室屋なり。○ひとさには……人多くふり。梟帥の一黨をいふ。○きいりをり……來入り居りなり。○いりをりとも……たとひ幾千百居るとても

意。○みつし。……久米の枕詞。○くめのこらが。……久米の子等がなり。大
 久米命の引率せる軍兵をいふ。○くぶつ。い。……かぶつちと云ふ事。かぶつ
 ちは頭槌と書きて神代時代の劍の製法の一つの名なりといふ。後世古塚な
 どより掘り出だせる雷槌といふ類にやこの説あり。○いしつ。いもち。……
 石槌持ちての意。くぶつ。いは製法によりたる名にて。いしつ。いは物質
 によりたる名ふるべし。○うちてしやまむ。……撃ちて後止まんの意。○いま
 うたばよらし。……今撃たば宜しの意。

官軍一たび此歌を聞かば如何ふる強敵も懼るゝに足らざるべく。賊徒一た
 び此歌を聞かば戦はずし先づ膽死するの感ありしからん。入り居りこ
 もの句。撃ちてし止まむの句。掛け合ひて勇氣勃々たるを覺ゆ。

いまはよ

い。ま。は。よ。い。ま。は。よ。あ。し。や。を。い。ま。だ。に。も。あ。い。よ。い。ま。だ。に。も。あ。い。よ。

前の歌を聞きて官軍一度に起り立ち賊を討ち殺したれば喜び勇みて此歌
 を歌ひしふり。○いまはよ。……今はなり。○あしやを。……あしは笑ふ聲し
 やをば可笑しといふに同じ。○いまだにも。……今なりとも。意。今かく討ち
 盡されても猶といふに同じ。○あいよ。……吾子よにて殺されし人々を指せる
 ならん。吾子よ今は如何。斯くても猶敵對し奉るかの意なるべし。
 簡單ふれども快樂の聲みちたり。以て勝鬨に代ふべし。以て凱歌に充
 つべし。

みつし

其一

みつし。くめのこらが。あはふには。かみらひとも。そねがも。そねめつふ

まさに刺されんとす。殊に皇兄を痛ませ給ふの深き。何ぞこゝに至るや。臣民たるもの此御製を朗吟せば。以て治國撫民の大業を建てさせ給ひし至大至愛の徽應を窺ひ奉るべきなり。一篇分つて三段となし。法あり調あり。實に後世軍歌の模範たるものと評し奉るべき。

うちはしの

うちはしの。つめのおそびに。いでませこなたまでのいへの。やへのこと。いでませの。くいはあらにぞ。いでませこなたまでのいへの。やへのこと。

天智天皇の御時の童謡。いはゆる流行唄にて。大火の有りたる頃。世に歌ひはやしたるなり。○うちはし……打橋とは書けど實は移橋の意にて。何處にも取り移してもてやきて懸け移さるゝ橋をいふ。○つめのおそび……つめは頭の字にて橋頭の意なり。おそびは遊の文字。○いでませ……出で座

せ子あり。子は人を親とみていふ詞。○なまでのいへの……玉代の家のなり。玉代は大和高市郡の地名。○やへのこと……八重込の外にふるべし。○くいはあらにぞ……悔は有らざるぞの意。飾なく有りのまゝなる詞の内におのつがら諷喻を帯びたる如く。いつこかに雅致を含みたるは。さすが上古の童謡なるを味はふべし。

みえしの

其一

みえしの。えしの。あや。あや。そは。しま。もえき。えくるし。あ。あきの。も。せりのも。あはくるし。

其二

おみのこの。やへのひも。く。ひこへだに。いまだとかねは。みこのひも。く。

まさに刺されんとす。殊に皇兄を痛ませ給ふの深き。何ぞこゝに至るや。臣民たるもの此御製を朗吟せば。以て治國撫民の大業を建てさせ給ひし至大至愛の徽慮を窺ひ奉るべきなり。一篇分つて三段となし。法あり調あり。實に後世軍歌の模範たるものとや評し奉るべき。

うちはしの

うちはしの。つめのあそびに。いでませ。たまでのいへの。やへののこに。いでましの。くいはあらにぞ。いでませ。たまでのいへの。やへののこに。

天智天皇の御時の童謡。いはゆる流行唄にて。大火の有りたる頃。世に歌ひはやしたるなり。○うちはし……打橋とは書けど實は移橋の意にて。何處にも取り移してもてゆきて懸け移さるゝ橋をいふ。○つめのあそび……つめは頭の字にて橋頭の意なり。あそびは遊の文字。○いでませ……出で座

世子あり。子は人を親しみていふ詞。○たまでのいへの……玉代の家のなり。玉代は大和高市郡の地名。○やへののこに……八重辺の外にふるべし。○くいはあらにぞ……悔は有らざるぞの意。飾なく有りのまゝなる詞の内におのつがら諷喻を帯びたる如く。いつこかに雅致を含みたるは。さすが上古の童謡なるを味はふべし。

みえしの

其一

みえしの。えしのあや。あやこそは。しまもえき。えくるしぬ。あぎのまご。せりのもご。あれはくるしぬ。

其二

おみのいの。やへのひもえく。ひもえく。いまだらちねは。みいのひもえく。

其三

あかじまのいゆきはゝかる。まくすはら。ふにのつていふにいしえけむ。

天智天皇崩御の頃。壬申の亂起るべき前兆を示したる童謡なり。○見えし
ぬの……三吉野のなり。大海人皇子の入れせ給ひし土地なり。○えしぬの
あゆ……吉野の鮎ふり。鮎は吉野川の名産なれば之をいひて皇子を比喩
す。○しまへもえき……島邊に住むこそ好けれの意。○えくるしゑ……嗚
呼苦しいかなの意。○なぎのもと……水葱の下なり。○せりのもと……芹
の下ふり。○あはれくるしゑ……嗚呼苦しいかなの意。前のえとあはれと
大方似たる詞を知るべし。

おみのこの……臣の子のふり。○やへのひもとく……八重の紐解くふり。
○ひとへたに……一重さへの意。○いまだとかねば……未だ解かぬの
意。○みこのひもとく……皇子が其八重紐を解き給ふの意。

あかじまの……赤駒のふり。○いゆきはゝかる……行き憚るふり。○まく
すはら……真葛原なり。○なにのつていふ……何の傳言を頼み給ふふら
しの意。○たゞにしえけむ……直に行はせ給ふが好からんの意。

第一首の意は。吉野川の鮎は其住むべき處を撰びて。清き川瀬に住まんこ
そ好けれ。それに濁川なる草葉の下などに住むは其苦惱おもふべし。大海
人皇子の御身もかくの如しとふり。

第二首の意は。天皇崩御の後。朝廷の事は紐の結ばれたる如くに百事滯
したるを。大臣等の解かんことすれど解く能はざる間に。大海人皇子は既に
事を擧げさせ給ふとなり。

第三首の意は。馬蹄さへも入る能はざる程の。草深く路峻しき吉野の要害
を手に入れながら。何に人の傳言ふどを頼みにして猶豫し給ふならん。此
時失ふ可からず。直に事を擧げ給へことす。め奉れるなり。

事母に比喻を設けて天下人心の歸する處を述べ。皇子は以て勇み給ふべく朝廷は以て戒むる處あるべし。是ぞ諷刺的童謡の得たるものといふべき。

(二) 中古の歌曲

(奈良朝以後王朝の中頃までに起れる歌曲ふり謂はゆる管絃歌曲時代)

第一種 神樂歌

神樂歌とは神前にて奏する歌曲をすべて稱ふるふり。禁中内侍所の御神樂に用ひらるゝものを始とし。諸社の祭典に用ふる東遊。大和舞。田舞。久木舞の類是なり。

神

其一

神葉の。香をかぐはし。み。とめくれは。八十氏人ぞ。まごぬせりける。八十氏人ぞ。まごぬせりける。

其二

神垣の。みむろの山の。神葉は。神の御前に。まげりあひにけり。まげりあひにけり。

其三

神葉に。ゆふとりまてい。なが世にか。神の御前に。いはひそめけん。いはひそめけん。

其四

霜やなび。おげご枯れせぬ。神葉の。立ち榮ゆべき。神のさねかも。神のさねかも。
 神の枝を持ちて舞ふ時の歌なり。下の句を二度うたひ返し。又は結句を二
 度うたひ返す事は此神樂歌の特性にて。後世これに習ひたる歌を神樂歌調
 ぶと稱ふるなり。○香をかぐはしみ……香の高くかをりたるが故にあり。
 今いふ神には香ふしとて古來考證家に論の有る處なれど。サカキは榮木の
 意にて。何にても有れ常磐木の青々としたるものを古へに稱へし名と見れ
 ば妨なし。○とめくれれば……認め來ればあり。○八十氏人……神に仕ふる
 人々をいふ。○まごぬ……圓居にて神前に集まり居るの意。
 みむろの山……社地の山をいふ。
 ゆふとりしで……ゆふは木綿といふ古代の織物の名。しで……は垂らし
 ての意。後世に御幣を神に付くる事の起りなり。○いはひそめけん……祭
 り初めけんといふに同じ。

霜やなび……霜八度にて幾度もの意。○神のさねかも……さねは神官の
 事にてその神葉の如く立ち榮ゆべきと祝へるあり。かもは後世いふかぶの
 古言。

無味に似たる處却つて神葉の香あるを覺ゆべし。之を神さびたる聲にて
 歌ひあげん時。神慮や如何にす……しからん。神慮や如何にいやちならん

篠

其一

此さへは。いつこのさへぞ。とねりらび。腰にさびれる。鞆岡のさへ。こもをかの
 さへ。

其二

さへわけば。袖こそやれめ。刀禰川の。石は踏むとも。いざ川原より。いざ川原よ

り。
 其三
 さいの葉に。雪ふりつもる。冬の夜に。豊の遊びを。するがたのしき。するがたのしき。

其四

みづがきの。神の御代より。さゝの葉を。たぐさにとりて。遊びけらしも。あそびけらしも。

是も神に同じく持ちて舞ふものあり。結句を繰り返す事も前に同じ。○いづこのさゝぞ……自問自答の格あり。○とねり……令人と書きて天皇の御身近く仕へ奉る役の名。武器を帯ぶるが常なる故。鞆の字を呼び起す序とせり。○とにさがる……鞆は腰に下げて持つもの故にいふ。弓射るに用ふる武器あり。○鞆岡……山城乙訓郡。

さゝわけは……笠原を分け入らばあり。○袖こそやれめ……やれめは破れんの意。○刀福川の……上野の川の名。○いぞ川原より……よしや石を踏みて惱むとも。いぞく川原を通りてゆかんとなり。これは戀の歌なりしを笠の縁にて神樂歌に加へしふるべし。

豊の遊び……神樂の事。

みづがきの……「みづがきの久しき時や」ふどよみたる如く。久しきの枕詞に用ふる例なるを。こゝには直に久しきの意として用ひたり。○たぐさにとりて……手草に採りてあり。手草とは舞人の手に採るものをいふ。是は天岩戸の古事を引きたるあり。

四首ともに心を清浄の境に遊ばしむる事神の曲におこらす。

弓

其一

弓といへば。志なきものを。梓弓。まゆみつま弓。志ふこそあるらし。志ふこそあるらし。

其二

さつをらが。持たせの真弓。おく山に。御獵すらしも。弓のはす見ゆ。弓のはす見ゆ。

其三

四方山の。まもりになのむ。あづさ弓。神のなからに。今じつるか。今じつるか。

其四

あづさ弓。春來るごごに。すめ神の。豊のあそびに。あはんとぞおもふ。あはんとぞおもふ。

是も神籥など、並び立ちたる歌あり。○志なきものを……種類の無きが如くに見ゆれど之意。○梓弓……梓の木にて作れる弓。○まゆみ……まゆみの木にて作れる弓。○つきゆみ……槻の木にて作れる弓。さつを……獵師をいふ。○真弓……此下に持ちてといふ詞を入れて見るべし。○弓のはす……弦を懸くる處をいふ。其上部ふるをウラハズといひ。下部ふるをモトハズといふ。こゝは上部の方なり。

まもりに頼む……四方山を國防として頼む如く。弓を身の守りに頼むの意ふるべし。○神のなからに……もはや泰平の世にて身の守りに必要なければ。神社に納めて神寶とするの意。

あづさ弓春來る毎に……梓弓を張ると言ひかけて春の枕詞とせり。是は弓の歌ふらざれど。詞のあるによりて之を用ひ神樂の面白きよしを述べたるあり。○すめ神……皇神の意なれど常にたゞ神といふ事に用ふ。

第一の歌は弓の品多きをいひて其愛すべく翫ぶべきを述べ。第二の歌は獵に用ふべき要具ふるをいひて。供御神饌ことごとく是に因りて得らるゝを示すが如く。第三の歌は武器も神寶と爲して、泰平の御代を樂しむ心をあらはし。第四の歌は一步を進めて。年毎に春毎に此泰平の御代に逢ひ。此面白き神樂の遊に會せんと欲する希望を詠たり。一讀人をして鼓腹の民たる感あらしむ。

劍

其一

志るがねのめぬきの太刀をさげはきて。奈良の都をねるは誰が子ぞ。ねるはたが子ぞ。

其二

いそのかみ。ふるやをどこの。太刀もがな。組の緒まで。官路かよはん。みやぢかよはん。

其三

いはひこし。神はまつりつ。あすよりは。組の緒まで。あそべ太刀はき。あそべなちはき。

其四

おきつきに。すめ神たちを。いはひこし。心はいまぞ。たのしかりける。たのしかりける。

志るがねのめぬきのたち……白銀の目貫の太刀あり。裝飾の美麗なる太刀あり。○さげはきて……太刀の紐を長く垂らして佩くを云ふふるべし。○ねるはたが子ぞ……ねるとは静かに歩むをいふ。すふはち美麗ふる装ひして都をねりあるくは誰が子らんと。其風采を賞美せし歌あり。

いそのかみ云々……石上布留といふは大和の地名なり。その男が劔に關する物語のありしをよめるならん。今は知られず。○太刀もがな……其太刀が欲しきごふり。○紐の緒して……紐糸もて作れる紐を太刀に垂らしてあり。○宮路かよはん……都の大道を通ひあるかんとごふり。美麗の装ひして人に見られん事を希ふことなり。

いはひこし……祭り來しといふに同じ。○神は祭りつ……祭式を濟まじなりの意。○あそべたちはき……太刀を佩き装ひして遊びあるけの意ふるべし。

おきつき……多く墓所の事にいへど。こゝは神社の事なり。此歌は太刀の事なけれど。すめ神たちと同音の字あるを以て太刀の處に加へたるふり。古人簡易の思想は是にても見るべし。

太刀の武器たる用ひ既に隠れて。たゞ神寶ごふり裝飾品と爲れるを見る。

いかでか泰平の曲を奏せざるを得ん。

しながごり

其一

しながごり。猪名の湊に。あいぞ。入る舟の。かちよくまかせ。舟かたぶくふ。ふねかたぶくふ。

其二

わかくきのや。妹も乗りたりや。あいぞ。我も乗りたりや。舟かたぶくふ。ふねかたぶくふ。

しながごり……枕詞。○猪名の湊……攝津の國あり。○あいぞ……拍子を添へて歌ふ意味なき詞。今日いふヤアトセイふごの類。○かちよくまかせ……櫂をよく執れの意。

わかくとの……妹の枕詞。や文字は調へのために添へて歌ふ詞。この二段は神事に縁なし。なや興に歌ひて神慮を慰め奉るものと知るべし。よく味は。三十一文字の能はざる餘韻ありて。歌曲特別の長所たる點を見出だす事も難からざるべし。

早歌

其一

や何れぞも。さうぞまり。や彼崎こえて。

其二

や深山のこつら。やくれこつら。

其三

や鶯のくびさろんと。やいとほはな長うて。

其四

やあかばり踏むふまりふる子。や我も目はあき先なる子。

其五

やとねり來んぞまりこんぞ。や我もこんぞまりこんぞ。

其六

やあちの山せやま。や背山のあちのせ。

其七

や近衛の御門にこゝ落いつ。や髪の根のふければ。

其八

やをみふのこえは。やまもつきまはすのかきこぼり。

其九

やあふりどやひわりど。やひわりどやあふりど。

其十

やゆすりあげよそりあげん。やそりあげよゆすりあげん。

其十一

や谷からゆかば岡からゆかん。や岡からゆかば谷からゆかん。

其十二

やこれからゆかばかれからゆかん。やかれからゆかばこれからゆかん。

詞みどかくして早く歌ふ曲ふれば早歌といへり。是は何れも問答体に出
來たる歌にて。當時それ〱の風俗を詠。又は諷諭の意味を寄せなごせ
しものなるべし。神樂歌に加はりたるは例の餘興のためのみ。○第一の歌
は。何れの處に留まるぞと人が同へば彼崎越えて向の方に留まるふりと
て一人が答へしなり。句の頭毎に有るや文字は意味ふく添へたる詞。
第二の歌は。深山の小葛を繰れ〱との意。

第三の歌は。鷲の頸取らんと思ふといへば。甚又長くて取りがたしとなり。

第四の歌は。後ろより來る子よ我足の輝を踏むなよといへば。後ろの子に
たへて。我も目はあり恐るゝ勿れといへるなり。

第五の歌は。舍人よ後ろから來よといへば。舍人こたへて。我も後ろよりゆ
くべしといへるふり。

第六の歌は。あちらの方の山は背山ふり。その背山のあちらには我夫あり
と慕ひていへるなり。

第七の歌は。誰か入道せし人の冠つけて。更に昇殿せし時などに。脱けたる
事ありしを嘲り歌ひしにやと云ふ。近衛の御門は陽明門のこと。こゝは中
子と書きて冠の一部分の名。

第八の歌は。女子の財はと一人が問ふと。それは十一月十二月頃のかきこ
ぼりを以て財とすと一人が答ふるふり。かきこぼりとは稻を納むる時に

こぼれたる淑をいふ。

第九の歌のあふりとは腋戸などの風にあふらるゝを云ひ。ひわりとは檜割戸の意あるべし。何か寓意の有るならん。

第十の歌のゆすりは動揺せしむること。そゝりは自ら進みあがること。前の戸につゝきたる歌にも有るべし。意味は汝ゆすりあげよ我はそゝりあげんと一人がいへば。之に答へて。汝そゝりあげよ我はゆすりあげんと。一人が反對をいひたるにて。意地わるき政治論者などを諷せるに似たり。

第十一の歌も前の歌に似て。汝谷からゆかは我は岡から行かん。と一人いへば。又その反對を一人が答へしあり。第十二の歌も詞をかへたるまでに意は同ト。

何れも寓意のある處を詳にせざれども。辭簡にして情深く。當時の人を喜ばせし歌ふることは疑ふべからず。後世はたして是等に似たるものあり

や。比へ見て。其當時の言語風俗と諷喻の方法とをよ〜研究すべし。

(第二種) 催馬樂

催馬樂は當時の俗曲なるが。遂に禁中の御遊または貴族社會の宴樂に用ひらるゝものをいふ名あり。曲の中に「さいばり」といふ歌あるによりて稱へ初めたるが。全体の名とあり。支那の樂名に似せてむつかしき文字を書くやうになりたるあらんといふ。組織は神樂歌と大方同ト。

伊勢の海

伊勢の海のいせの海の。清き渚の。汐がひに。なのりそやつまん。貝やひろはん。玉やひろはん。

汐がひ……汐間にて汐の干たる間をいふ。○なのりそ……海草の名

餘情おのづから長し。

更衣

衣がへせんや。さきんだちや。わがきぬは。野原篠原。萩の花すりや。さきんだちや。

是は夏冬の始めに春と秋との衣を脱ぎ更ふることには非ず。人ご人と衣を交換する事をいへるふり。○さきんだち……やさきんだちにて優しき公達の意ふりとも又は先ん達の意にて一座の長をいふとも云へり。何れにもあれ我戀人のために盡し、心を他人に向ひて許ふる意と見るべし。○野原篠原云々……戀人のために心うかれて野を分け篠原を分けして遂に萩の花摺衣ごふりたるを。今は御身と取りかへんとなり。戀人の無情ふるを恨む心にも見られ。又その勞苦を他人に誇る心にも見らるべし。

戀の分子あるは歌曲の常ふるが。後世のものごと比へて其興味優劣いづれらん。

老鼠

西寺の。おいねずみ。老鼠。おん裳つんづ。袈裟つんづ。袈裟つんづ。法師に申さん。師に申せ。法師に申さん。師に申せ。

何か當時の事實にあて、諷せしなるべし。○つんづ……つみつに同じ。啄むこと。一首の意は。橋守部いふ。西寺の老鼠と若鼠と。袈裟御裳等を啄食む。これを早く師に申せと云ひて。今おほやけに。父子心を合せて。御物をかすめ取る者あり。これを早く公に申せと云ふたぐひの諷諫ふるべし。

紀伊國

其一

紀の國の。きのくにのや。まらゝの濱に。真まらゝの濱に。おり居る磯。はれ。その玉もてこ。

其二

風も吹いたれば。ふぐりしも立てれば。水底きりて。はれ。その玉見えず。

はれ……音調の上に添へたる詞。○ふぐりしも……風の吹きあれたるあゝに波の立ち残れるを云ふ。○水底きりて……烟りてといふに同じ。霧の文字を動詞にしたるあり。

此歌は第一段と第二段と問答のさまふり。罪なき海人少女が無情の鳥と問答せるにやあらん。おもしろき境界。あふれたる風致。

葛城

其一

葛城の。寺の前なるや。ごよらの寺の。西ふるや。おしとんご。

其二

榎の葉井に。白玉しづくや。真白玉しづくや。おしとんご。おしとんご。

其三

しかしでは。國を榮えんや。わいへらぞ。富みせんや。おしとんご。おしとんご。おしとんご。おしとんご。

此歌は光仁天皇の未だ天位に即かせ給はざりし頃。その御登極あるべきを示したる童謡のよし續日本紀に見ゆ。白玉は天皇の御薙白壁にあたり。井は御妃たりし井上内親王の御事にあたり。○おしとんご……此事は秘すべき事ふれば高聲にいふ勿れと押し止むる意を含めて。調へを添ふる詞にあふたるふるべし。○しづく……水底に沈みたるものが透きて見ゆるをいふ。○しかしでは……其白玉を取り上げたらはの意。御即位ありたらはと。暗に

いへるなり。○わいへらぞ……我家等ぞなり。人民めいくの家々がなり。

此殿者

其一

此殿はむべもむべも富みけり。さき草の。あはれ。さき草の。はれ。

其二

さき草のみつはよつはの中に。殿づくりせりや、殿作りせりや。

是は「此殿はうへも富みけりさき草の三つは四つはに殿作りせり」といふ古歌を取りて、殿作りを祝ふ歌曲に組み立てたるあり。次の曲も之に關するものゝ如し。○むべも……げにもの意。○さき草の……三つの枕詞。○三つは四つは……三棟四棟ふといはんが如し。○あはれ……はれ……共に調に添へたる詞。○一首の意は、守部の説に、此家はげにも富み榮えにけり。

追々に子孫をかえて。三夫婦四夫婦と殿の造合も数そひ。三棟四棟と家づくりふしゆけばとなり。とあり。此説尤然るべし。

此殿西

其一

此殿の。このこの。西のくらがき。春日すら。あはれ。春日すら。はれ。

其二

春日すら。行けど。行けどもつさず。西のくらがきや。西の倉垣や。

くらがき……倉庫の長く立ちつゝきて垣の如くふるを云ふ。○す春日ら云々……春の永き日に行けどく／＼倉庫は盡きはてすして長くつゞけり。とあり。是も家の富めるさまを祝ひたるなり。

淺綠

淺綠や。こいはなだ。染めかけたりと。見るまでに玉ひかる。下ひかる。しんきやうすさかの志だり柳。まだいたぬとふいせんぞい。秋萩無子。からほひ。しだりやふぎ。平安京の盛ふるを賞美せしに似て。暗に其華美に過ぐるを譏れるにやこの説あり。○こいはふた……濃き花田色なり。○玉ひかる……玉の如く光るあり。○下ひかる……その木陰まで光るなり。○しんきやう……新京あり。奈良の舊京に對していふ。○すさか……朱雀大路のこと。こゝに花と柳を植ゑられたり。○まだいたぬとなる……まだき田居と爲るの意。かく盛なる新京は未だ時も經ざるに。早く田居と荒れはつべしこのことを氣せるならん。○せんぞい……前栽あり。以下の文句は。新京官人の前栽なる色々の花木も遂には田居のものとならんと前へ返して見るべし。○からほひ……からあふひといふ花の名。

あらはに言はずして華美を極めたる様を述べ。わづかに田居の文字を以て有司の戒心を喚起せしむるやうに歌へるは。興あり力ありて後人の企て及ばざるところ。

酒飲

酒をたうへて。たへゑうて。たふごこりんぞや。まうでくる。ふよろほひぞ。まうでくる。たんな。たんふ。たりや。らん。たりちりら。酒をたうへて云々……酒を飲みて飲み酔うてあり。○たふごこりんぞや……俗に云ふタント懲リルナランの意。○まうでくる……酔人の参り來るあり。○なよろほひぞ……よろけ倒るなどあり。○たんな云々……笛の譜か何かを拍子に取りて。蹠蹠たる醉脚のさまをあらはしたるあり。酒客を嘲り笑ふ内に戒むる心こもりて見ゆ。

難波瀉

なんばの海。なんばの海。漕ぎもて上る。小舟大舟。筑紫津まで。今少しのぼれ。山崎まで。

なんばの海……ふにはの海の音便ふり。難波の字音ふるには非ず。○筑紫津……難波より淀川までの間の舟つきふるべし。

おのづから歌曲特別の姿にて。生れのまゝの風韻あるを味ふべし。

鈴之川

すいか川。すいか川。八十瀬の瀧を。皆人の。めぐるもしるくや。時にあへる。時にあへるかもや。

すいか川……伊勢の鈴鹿川なり。○八十瀬の瀧を……此川二里許の間を。

右に流れ左に行き。幾度も渉る故に八十瀬と號すといへり。瀧は其急流なる處をいふ。○皆人の……渡る人々のふり。○めぐるもしるくや……右に左に幾度もく廻りくせし結果も著るくの意。以上は川を比喻にして人間の辛苦難難を重ねしさまをいへるなり。○時にあへるかも……其川水の流れくして遂に世に出づる如く。人間も待ちし時世にあひけるよとなり。比喩平易にしてことわり面白く。字句簡潔にして姿肥えたり。

石川

其一

石川の。いままらうどに。帯を取られて。からき悔いする。

其二

いかふる。いかふる帯ぞ。はふだの帯の。中は絶えたる。

其三

かやるかあやるか。中は絶えたるか。

是は當時歸化人の悪風俗ふりしを譏れるに似たり。○石川……河内の國にて高麗人の住みたる處。○こまうど……高麗人ふり。○帯を取られて……帯をさらへられてふり。奪ひ取らるゝ意には非ず。○からき悔いする……辛き後悔するの意。高麗人の亂暴ふるを女の厭ひていへるふり。

いかなる帯ぞ……その執られたるは如何ふる帯なりしぞ。他の一人が問へるなり。○はなだのおびの云々……それは花田色の帯ふりしが。執られし時に中より斷ちさられたり。前の女が答ふるふり。

あやるかかやるか……他の一人がいふふり。此詞は古來とまゝに説あれど。守部のあゆるか悔ゆるかの意にて。其帯の絶えたるにあやかり。本の男の中を絶えて高麗人に従ふか。又はいよく帯を執られたるを悔ゆるかと

いふにや。この説なしかなるやうなり。

當時外人雜居の有様以て見るべし。戀の情を述ぶるに似て戀に非ず。事一時の戯に似て實は大問題なり。斯くの如き作は歌曲中多く得がなし。

我家

わいへんは。どはりちやうをも。垂れたるを。大君來ませ。聲にせん。御者に何よけん。あはびさなえか。かせよけん。あはびさなえか。かせよけん。

わいへんは……我家はふり。○どはりちやうをも……帷帳をもなり。室内を裝飾するをいふ。○御者に何よけん……さて聲に來給はゞ其御もてふしの御者には何がよからんとなり。○あはびさなえか……蛇をか蘇せん榮螺をか蘇せんとあり。○かせよけん……かせは甲冑と書く貝の名なり。是が宜しかるべしとなり。

大君といひ聲といふ。何か容易ならぬ比喻の有りそうなり。當時の歴史と見くらべふば。おのづから會得せらるゝ事もあらん。歌曲も徒に一時の興のみならざるなり。

第三種 今様

今様とは當世風の歌曲といふ意にて。中古の末期より近古に至り行はれたる七五調のものをいふ。源平時代の頃。白拍子ふどの歌ひしは大方これあり。句法は七五を四つ重ねたるを常とす。

志ら露

白露は月の光にて。王土うるほす化あり。権現舟に棹さして。むかひの岸に寄す

る波。

平康頼鬼界島にて熊野権現の法樂に歌ひしよし。源平盛衰記に見ゆ。當時流行せし調ふるを知るべし。権現は熊野を指し。向ひの岸とは。佛法に頼はゆる到彼岸の意にて。此世の迷を去りて彼世の悟を得ること。此頃より。歌曲界に佛法のいちじるしく侵入せしを覺ゆ。

千手の誓ひ

よろづの佛の。ぐわんよりも。千手の誓ひは頼もしや。枯れたる木草もたちまちに。花さき實ふることを聞け。

是も康頼成經の夢中に靈驗のありたる歌のよし同書に見ゆ。千手の誓ひとは千手觀音の誓約にて。千手陀羅尼といふ經文を讀誦すれば。其功德にて枯木にさへ花さき實なるを得るといふ佛説を歌へるなり。佛法の世に弘ま

りしさま。歌曲の佛法を親和せしさま。以て見るべし。

さまも心も

さまも心もかはるかふ。落つる涙は瀧の水。妙法蓮華の池を爲り。弘誓の舟に掉さして。沈むわれらを乗せ給へ。

是も康頼の歌ひしあり。さまも心もは姿もやつれ心も弱り果てたるの意。弘誓の舟とは佛の弘き誓約もて衆生を濟ふを舟に譬へし經文の文句なり。

佛の方便

ほとけの方便なりければ。神祇の威光たのもしや。たゞけはかならず響きあり。仰げばさだめて花ぞさく。

右のつゞきに出で、是も康頼のうたひしなり。神祇卷二のうたごめれば其

頃おこふれし曲なる事しらる。

心の暗

心の暗の深きをば。燈籠の火こそ。照らすふれ。彌陀の誓ひを頼む身は。照らさぬ所はふかりけり。

是は小松内府の燈籠大臣と呼ばれし物語の處に。毎夜四十八体の佛に四十八の燈籠をさゝげ。美女を四十八人えらびて。其役に一人づゝつけおきた。るが。毎夕禮賛のつとめをふしをばれば。六人づゝ番を結びて。右の今やうを歌ひつゝ。四十六間をまはりしよし同書に見ゆ。佛の道もおのづから優美ふる光を見せて。衆生濟度の方便に近づきゆくは歌曲の力大ふるに居らん。

蓬萊山

蓬萊山には千とせ経る。萬歳千秋かきなれり。松の枝には鶴巢ぐひ。巖の上には龜あそぶ。

祇王祇女といふ白拍子の平相國に召されし時うたひし曲ふり。其時つくりしには非ず。祝意句毎に満ちて頗る古雅ふり。

君をはじめて

君をはじめて見る時は。千世も經ぬべし姫小松。御前の池なる龜岡に。鶴こそむれぬてあそぶふれ。

祇王の後に佛といふ白拍子また出で來れり。其初參の時うたひしなり。古雅なるさまは前の曲に劣らず。

ふるき都

ふるき都を來て見れば。淺茅が原とぞなりににける。月の光りはくまなくて。秋風のみぞ身にはしむ。

都を福原へ移されし後。後徳大寺左大將實定の舊都の月を詠せし歌ふり。前二句に人事の變遷多きを述べ。後二句に造化の無盡藏なるを吟じ出だせり。感慨秋風と共に長く。幽趣月光と共に限なし。

(三) 近古の歌曲

(鎌倉幕府の創業より江戸幕府の以前に至る。いはゆる拍子歌曲の時代ふり)

第一種 宴曲

宴曲は遠く催馬樂朗詠(詩歌をうたふもの)ぶどより來りて。近く謠曲の根源をなすものゝ如し。鎌倉時代に行はれて宴席ぶどに歌はるゝより此名を得しなり。その歌曲の。既に示したる前代のもの。後に示す近古末期のもの。精粗雅俗の差に至りては。實例に就きて研究せば。之を味はひ分くるを得ん。

年中行事

大具木徳の春のはじめ。一天風のごがなり。千年をさして契るは。霞みて出づる朝日影。四方拜小朝拜。かの白馬踏歌の節會の儀。子の日の松をひきてこそ。君がよはひをいのりけれ。春日平岡率川園韓神大原野。日々をさなむる神わざ。宵き

さらぎの事なり。魏年のむかしのおみ。周且曲水の舊き風。たえぬふがれをさめて。遍きは是れ桃花の水。鶴に乗りし仙人の。花に遊びし茅君洞。凡そ世間の美景は。春三月を賦せる詩。中天竺の藍毘陀。卯月の八日は佛生日。其神山のもろかつら。誰かたのみをかけざらん。曙雲の外野公。ふくや五月のあやめ草。ながきためしに行きけるは。郁芳門院の根合。螢火のかやく神と五月蠅なす。慈しき神とを平らげて。河瀬に流すゆふしで。歸る袂に吹きそめて。涼しき秋の初風。年年渡る天の河。雲井の庭の乞巧真。玄宗皇帝の楊姬が眉にかゝりて。比翼連理と契りし。驪山のむかしぞゆかしき。秋のも中のかひありて。月に心のあくがる。陽明門の一廻。詩歌管絃のあそびあり。都の南に男山。神の誓の放生會。上卿參議弁官。諸衛の佐まで供奉しけり。九日の宴は年替りて。久しき菊の盃。十三夜の佳明は。延喜よりぞつたはる。神無月十日あまりの頃ふりし。朱雀院の行幸。紅葉の色にうつろひし。青海波の舞の袖。朔且冬至の叙位の儀。五節の舞姫のまゆりの

夜。辰の日の節會は、豊のあかりもおもしろや。月次神今食、内侍所の御神樂。雪も月日もつゝもる年。送り迎へて幾世とも。なほかきらぬは。我君の御代なりけり。

大異木徳……五行を四時に配當すれば春は木にあたる。支那の上古に太異伏羲氏といふ王は木徳ふりと有るを以て。春の形容詞とせしふり。○四方拜……正月元日に主上天地四方を拜し給ふ御式。○小朝拜……同日殿上人の拜賀を上つる式。○白馬……同月七日に豊樂院にて馬御覽の御式。○踏歌……同月十五日に行はる。簡易にいへば舞踏御覽のこと。○子の日……同月初子の日に野に出で、小松を引き祝ふこと。○春日云々……かすが。ひらなか。いさかひ。そのからかみ。おほはらの。と讀むべし。何れも二月に行はる、官祭の神事。○魏年のむかしのこと……此句と次の句とは三月三日に行はる、曲水の宴のことを云ふ。昔し支那の魏の文帝の時に曲水宴ありし故事。○周旦……是も周の代に周公旦が洛邑を領して曲水宴を始めし故

事。○遍きは是れ……唐の王維の桃源行に。春來過是桃花水。不辨仙源何處尋とあるを引く。○鶴に乗りし云々……大茅君といひし仙人の住みたる山を茅君山と名づけし事。神仙傳に見ゆ。○中天竺……印度を五天竺に分け其中央なるを云ふ。○藍毘苑……釋尊の母摩耶夫人の淨飯王に寵せられて共に花の宴を催したること。○其神山の……四月中の酉の日に行はる、加茂の葵祭のこと。神山は加茂の社の山。○もろかつら……祭日に氏子の人々葵と桂とを髪にかくるを云ふ。○五月のあやめ草……五月五日に菖蒲を引きて其根の長きをもて祝意を表するをいふ。○都芳門院の根合……堀河天皇の準母の御所にて。五月五日に菖蒲の根の長きを互に比べ争ひし遊び有りしを云ふ。○螢火の云々……神代紀に賤しき神たちを稱へし詞。高貴の神は大光明を身より放てと賤しき神は螢ほどの微光を持てるをいふ。○五月蠅ふす……五月頃の蠅の涌き出づるが如く騒ぎ立つ暴神をい

ふ。○河瀬に流すゆふしで……六月の晦日に水邊に出で、祓をするをいふ。木綿すなはち帝に身の罪穢をうつして流しすつるふり。○かへる袂に……祓の式をはりて歸り来るをいふ。○乞巧奠……七夕祭のこと。○玄宗皇帝が云々……揚貴妃を寵愛して七月七日の夜ちぎりし故事をいふ。驪山は宮の名。○陽明門……禁裡の御門の名。○男山云々……男山の八幡にて八月十五日に放生會の神事あるをいふ。○供奉しけり……行幸の儀式にて神輿の下るに御供をするふり。○九日の宴……九月九日に菊の酒の宴を群臣に賜ふをいふ。○十三夜……九月十三夜に月を賞すること。醍醐天皇の御時以後おこふはれたり。○朱雀院の行幸云々……源氏物語中の故事を引く。其時光源氏の君。頭中將と二人にて青海波といふ舞樂を舞ひしふり。○朔旦冬至の……十一月一日が冬至の節に當る時は。吉瑞ふりとして公卿等の位を進め給ふ事あり。○五節の云々……十一月豊明節會の時に行はる、五

節の舞姫の前以て參内する式をいふ。○辰の日……中の辰なり。○月次……十二月十一日に禁中にてある祭式。○神今食……月次祭すみたる後に有る是も神祭。○御神樂……十二月に吉日を撰びて行はる。是ぞといふ點もふけれど。一年中の公事人事を口調よくつづけたるが面白きふり。今もかゝるもの新に作りて兒童に教へ習はさば一興なるべしとぞおもふ。

春

霞たなびく雲井より。春立ちけりふ天の戸の。明くる氣色ものどかにて。鶯さそふ春風。かすむとすれど淡雪の。下草は猶結ばれて。岩間の氷解けやらす。いかでか春の越えつらん。不來なこまの關の東路。そよや有らまほしきは。梅が香を。櫻の花に匂はせて。柳が枝にさかしてしがな。百千鳥。木傳へは巳が羽風にも。亂れぬべき

物をふ。誰におほせてか。啼く音も絶えせざるらん。八重咲冬。紫ふかき藤浪。汀に
なびく池の面。とりどりにぞや覺ゆる。まひてや手折らまし。をらしてやかざい
まじやな。三月の永き春日も。ふほあかふくに暮らしつ。

なこそその關の云々……春は東方より來るといふに依りて云ふ。ふこそ(勿
來)といふ名の付きたる關を如何にして春は越えつらんの意。○梅が香を
櫻の花に云々……古歌を引く。○木づたへは云々……古今集素性の歌に
「木づたへは己が羽風にちち花を誰におほせてこゝらなくらん」とあるを
引く。○春立ちけりな……物をな……かざ、ましやふ……此ふや等の文
字は何れも調へを添ふるための感詞。
何となく優美に聞えて。春風の身を吹く心地せらるゝは。調への然らしむ
るものふらん。歌曲としては特色の點あるを覺ゆ。

夏

花は根に。鳥は古葉にや歸らん。惜みし物を櫻色に。染めしは花の袂をいつしか。
更へはてぬにきたる夏衣。卵の花さける玉川の。かせきにかゝる志ら浪。二葉に
見えしあふひ草。みあれのころや榮えん。勝先初音もめづらしき郭公。雲井の外
の一聲を。おもひもあへず詠むれば。強顔のこる晨明。水位増しぬや五月雨に。刈
る手もたゆき河長の。菅蒲はもらぬ軒端にも。築屋萱屋板廂。何もかはらざりけ
り。外面の木陰露深し。一むらすぐる夕立に。水増らざらめや鶴飼船。螢やかかり
かかり火や。螢にまがふ夕闇。今宵ばかりや六月の名残も惜しき木綿袂。麻の末
葉に。かふふや秋の初風。

花は根に云々……千載集好忠の歌に「花は根に鳥は古葉にかへるなり春の
ゆくへを知る人ぞなき」とあるを引く。○櫻色に云々……拾遺集重之の歌
に「さくら色に染めし袂のをしければ衣かへうき今日にもあるかふ」とあ

るを引く。○かへはてぬにきたる……夏の來たる衣を着たるを兼ねたり。○二葉に見えし……加茂祭に使ふ葵は二葉づゝ生えるものふれはいふ。○みあれ……加茂祭の日をいふ。○勝先……讀みがたし。誤字にや。○新る手もたゆき……たゆきはダルキの意にて疲勞を感ずること。水の多きがため新るに苦しむさまあり。○河長……河に入りて營業する人をいふ。○あやめはもらぬ軒端にも……屋根を葺くといへば雨の漏るところに限るやうなれど。五月五日の菖蒲は漏る漏らぬを論せず。何くにも葺くの意。○麻の末葉……麻の葉も秋に用ひて流しすつる故にいふ。七五なるべき五字の句を四字にかへて用ふるは。此頃より流行り出だせりと見ゆ。此曲の「さら浪」紫えん」ありあけ「ざりけり」夕やみ「末葉に」は「つ風」などの句以て見るべし。後の謡曲琴唄などに多く此句法を用ふるは。因つて來る處あるなり。

秋

取りし早苗のいつの間に。稻葉の鳴子引き替へて。秋風吹けば七夕の。妻むかへ船に契りてや。時しも聲をほにあげて。雲井をわたる馬金。遠の山路や霧こめて。友迷はせる旅人は。過ぎぬ秋や怨むらむ。露分けわぶる篠の目。春は紫にみえし若草の。花は野邊に。紅葉は峰に。いろごる露の玉ゆらも。日影を待ちえざりけるは。垣ほにつなふ朝顔。古枝にさける本荒の。小萩が花。菊萱女郎花。ほのかに招く夕ま暮。えう過ぎやられざりける。同一雲井のふどやらむ。七月八月九月に。ふれば久方の。月の都に。光ぞさやけかりける。賤が假寝の稻延。掉鹿の音に驚かされて。おどろかずなんふる物をな。山田の折木の寢覺は。夜や寒からん。つりさせと鳴く養。いかにすべき暮る。秋の。名残を忘たふ袂よりや。先は時雨れそむらんやな。

取りし早苗の云々……古今集よみ入しらすの歌に「きのふこそ早苗とり
 しかいつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く」とあるを引く。季候の變遷の速
 かなるに驚く……あり。○つまむかへ船……二星の會するとき天の川
 を迎へ渡す舟あり。○ほにあけて……古今集菅根の歌に「秋風に津を帆に
 あげて來る舟は天のこわたる雁にぞありける」とある詞を用ひたり。○過
 さぬ秋や……霧に隔てられて行き過ぎがたきをいふ。○篠の目……明方のこ
 と。○えう過ぎやられ……俗に云ふヨウ書かぬヨウ覚えぬふどのえうな
 り。○おどろかすなんなる……驚かす為るなるの意。聞きなれて目ざめぬ
 やうにふるをいふ。○折木……讀みかねたり。賤などの意にや。○つゞりさ
 せと……つゞりの衣をさせの意。虫の鳴聲をかく聞きなすあり。
 長短句を自在に用ひたるどころ。却りて正則のものよりも雅致あり。殊に
 結句の力あるは此種の曲の特點とやいはん。

冬

今日よりは間なく時雨の。間ふく時雨の布留の神杉や。年替りぬれば染めあへ
 なくになほ縁に。三輪の山本嵐や過ぎて吹きぬらん。僅に残る紅葉は。霜に枯れ
 行く浅茅生の。宿には人もとひこす。板井の水も水草ぬて。氷の上に霰ふり。小野
 の山里雪ふかし。跡だに見えぬ細道。春の隣の近ければ。老木は花もうらやまし。
 いとひてもいとふ方をふき。來る老いらくの關もり。とても佛名ぶつなにふりぬれば。三
 千世界恒河砂如來。諸佛菩薩受持名號。功德無量無邊引攝。頼もしくぞや覺ゆる。
 立ち舞ふ袖もまはし。追儺ついなの夜半の官人。

今日よりは云々……新古今集後鳥羽院の御製に「ふかみどり争ひかねてい
 かふらん間なく時雨の布留の神杉」とあるを引く。布留は大和の地名。降る
 の文字にいひかけたなり。○水草ぬて……神樂歌に「我門の板井の清水里と

ほみ人し汲まれば水さびにけり水草ぬにけり」とあるを引く。水草の生ずること。○佛名……十二月十九日より三日間禁中にて行はるゝ御佛事。○恒河沙如来……恒河は印度に在る大河の名。その川の砂の如く無量無数の佛如来の意。○受持名號……佛の名號を稱ふるること。○無邊引攝……淨土に導き給ふこと限ふしの意。○進儼……十二月三十日に惡魔を拂ふ儀式。經文の字句そのままに歌曲に入り來ること斯くの如し。見るべし世の嗜好の風潮と共に變つゝあるを。

夕

夕陽西に傾きて。東にかへり見れば。まだ麓は霧のへたてつゝ。山より遠の夕日影。さすがに暮れやはてざらん。松のゆきあひの本枯に。つれふき色を爰しても。外の木の葉や時雨らん。夕ぐえかゝる旅の空。かこつかたなきあはれは。夕べ

やわきてまざるらん。夕汐夕なぎ夕波千鳥。鳴く音さびしき夕ま暮。夕べの殊にわりふきは。野分の風も身にしみて。思ひ亂れし節かこよ。忘るゝ間ふく忘れぬ。夕べの空の村雲。にふほ立ちまよふ夕霧の。露の花の夕おめり。手折りし袖やそぼちけん。夕顔の花さく宿の主や誰。たそかれどきの空目はげに。おぼつかなくぞ覺ゆる。夕立の晴れぬる跡の夕づく日。影ろふかたの涼しきは。雲間を渡る夕風。夕霜の晚田の稻葉うちふびき。風にたまらぬ夕露は。結びもあへずや亂るらん。墨染の夕べの色のすこきは。權摘む山路のそぼつたひ。麓の野寺のはるばるど。そこもみえぬ歸るさに。時しもあれや入違の。かねて思ひし有増より。猶心澄む山陰の。五百代小田の夕嵐。草の戸ざしの明暮は。袖もほしあへぬ露の間に。聲弱りゆく故郷の。蓬が袖のさりとす。暮れ行く空の氣色。誰もあはれやまざるらん。夕べは脆き涙かふ。

たそかれどきは……源氏物語夕顔巻の故事。「光ありと見し夕顔の上露は

たそがれ時の空目ふりけり」の歌これなり。○墨染の……夕の枕詞。○しき
みつむ云々……山寺僧歸る夕への景色を畫がきつくせり。
此種の歌曲は七五調を以て組織せるものあるが、處々に五七五をなせる有
るは、此曲の「夕がほの」夕立の「霜の」墨染の「ふごの類を見て知るべし」諸
曲つねに此句法を用ふるは誰も知るべし。

山寺

千株の松の下には、青嵐窓すいしく、雙峰の軒の間には、白雪隣を締めたり。曉鐘
霜に響く聲。曉月露に寒き色。聞くに哀れを催し、見るに心をいたましむ。そも
そも天智の草創は、園城の舊院、百年餘の經行、其名を三井の水にや流すらん。桓
武の建立、叡山の靈嶺、七社の誓願あらたに、其威を四明に及ぼす。一乘圓宗の花ぶさ。
我立つ松に香ばしく。一心無現の月影。比良の高峰に耀く。麓を遙に望めば、白浪

湖水に連り。後を顧みれば、又紅葉岩上に色を副ふ。古松は瓦の□を隠し、老杉は
門を塞げり。霜深き庭の叢も、只浮世に歸るあともなく、霞み行く檜原を分け入
り。泊瀬山、人の心を知らねども、花はさだかに咲きけるは、泊り馴れにし宿の
梅。音に聞く其名も高き高野山。ふかき御室の遙々と、星霜舊き松の尸の。さして
幾夜の曉に出づへき光を契るらん。堂塔甍を連れて、佛像烏瑟の影を副へ。坊舎
窓を並べて、經論玉章の文を磨く。さても承和の頃かごとよ、梢の雪も寒き夜に。靈
鳥來て侍りしは、如何なる告なりけん。延喜の朝には御衣を贈り給ひしに、様々
の瑞相をあらはす。

天智の草創……天智天皇の御宇に建立ありしをいふ。○叡山の靈嶺……す
ふはち延曆寺あり。○七社……叡山中に祭れる七神の社あり。○四明……
叡山を支那の四明洞に比せし故にいふ。洞の上に四門ありて日月星辰の光
を通ずる故に四明と名づくを云へり。○一乘圓宗……天台宗のこと。○我

立つ袖……比叡山のこと。○人の心を知らねども……貫之の「人はいさ」の歌の故事を引けるふり。初瀬に参詣する道の話なれば。○承和……仁明天皇の年號。以下は高野山の故事なるべし。

寂々たる山寺の景をもて起り。佛法の靈驗をもて終りたり。當時に在りては有益有用の曲にして趣味に富みたる作とて詠ばれつらめ。

磯城島

夫れ磯城島日本うたかたは。簸の川上より流れ來て。心を難波津の浪によせ。或は又方の天よりくだり。或は八雲の風に傳ふ。三十文字餘り一文字は。人の代の事わざなれば。今も大君の御影曇らぬ詠び。賢きかぶや皇の代々に絶えせぬ道を知り。花に鳴く鶯は。言葉の林に囀り。水に住むてふ蛙は。心の泉に聲をそふ。麓の塵ひぢ山となりて。峰に棚引く白雲の。かゝる心の指南より。情を様々に願は

す。凡そ歌に六義あり。先づ風歌を始とし。其品あまたに別れつ。采女の戯れ涙かに。二歌は此道の。歌のまこと知らすなり。色好みの家に埋木の。人知れぬ心を通はし。武き道にはものゝふの。固き心を和らぐ。扱も奈良の古へに。拾ひ集めし言の葉の。跡を尋ねし御代かごよ。百年の樂しみを受けて。十續に撰びし古今集。天曆は普き歌の聖五人を。梨壺に定め置き。花山は舊き道を慕ひ。拾遺を三代の後に繼ぎ。其より以降。代々の聖主も是を捨てられず。春の朝の吉野山。櫻を雲に紛へけん。柿の本の家の風。何れも共に分き難き。山の邊の霞の色。立ちおとらすや聞やらん。又名をえたりし人は。僧正遍昭は。徒に繪にかける女の。心を動かす心地して。其誠や少かりけん。萎める花の色ふくて。薄にはひの残りしは。彼中將の歌の品。文屋の康秀は。商人の好き衣着ならん其様。身に負はずや見えける。曉の雲に見る月の。面影幽かに残りしも。宇治山の暮撰とは。小野小町は舊き名残り。いと物あはれふる。女のなやめる所ありしも。古への衣通媛が流ふり。大伴の

くろぬしははふの影に居て、薪を買へる山人。音羽の山の音にきけど。先づ言ひ渡る中河の。岩漏水のつゞけても、書きかくる玉章の。心も歌にや知るらん。目にみぬ人も斯に通ふ。たゞ此道の志るべなり。あらぶる神も□して、歌に徳を亮す。かたどけなかりし勅判は、亭子の院の歌合。天徳四年は小野の宮。村上の御宇に撰ばる。康保の秋の半。清凉殿の月の宴。色々の花を懸けても。歌をぞ殊に先とせし。光源氏は物語の。中にも深き心有り。飛鳥井につぐは袂衣。寐覺に歸る夜半の時雨勝。竹取の翁さびて。なほ住吉の濱松の。其名かはらぬ古こと。さながら歌の媒なり。和歌の浦や。道も昔に歸る浪の。よしあし分けて、藁蘆草。書き置く跡も絶えせず。

うたかた……水の泡をうたかたといふによりて歌の文字より云ひかけた。り。○ひの川上……素盞鳴尊の「やくもたつ」の御歌より三十一文字の歌は下まれりとの傳説によりていふ。即ち尊の天上より始めて降られしと言ひ

傳へたる出雲の土地。○心を難波津の……「なにはづに咲くや木の花」の歌と「あさかやま」の歌とは「歌の父母のやうに」と古今集の序にある故にいふ。○花にふく云々水にすむてふ蛙云々……古今集の序に「蛙の聲も歌ふるよし」いへるによりていふ。○麓の塵ひぢ……是も同序の詞。よむ歌の世に數多くなりゆく譬へ。○六義……一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。○同書漢文序にあり。○采女の戯れ……即ち上にいへる「淡香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」の歌のこと。○色好みの家に云々……同序に和歌の滌奔の道具とふりてたるを慨嘆せる詞なり。○武き道には云々……同序に「武き武士の心をも和らぐるは歌なり」とあり。○奈良の古へに云々……萬葉集のこと。○跡を尋ねし……延喜聖代のこと。○十續に撰びし……桓武天皇より宇多天皇まで十代の間の歌を撰ばれしを指す。○天曆……村上天皇の年號。後撰集勅撰の事なり。○五人……能宣。

元輔。順。時文。望城の五歌人が禁中の梨壺といふ御殿に出仕して撰びしをいふ。○花山は云々……拾遺集は花山法皇の御撰ふりとも公任の撰なりともいふ。是は前説に依りたり。○櫻を雲に……古今集の序に「春のあした吉野山の櫻は人磨が心には雲かこのみなんおぼえける」とあり。○山の邊の……赤人の事。○又名をえたりし……以下同序の意を取りて六歌仙の評判をいふ。○勅判……主上御みづから歌の優劣を判定し給ふをいふ。○亭子の院の……宇多上皇の御所にて歌合ありしをいふ。○天徳四年は……村上天皇の年號。この時内裏に歌合ありて。小野宮左大臣判辭を書きたり。○康保……是も同帝年號。月の宴の有様は榮花物語に出でたり。○光源氏は……以下は歌に縁故ふかき物語の名をあぐ。飛鳥井。寐覺ふといふもの當時まで傳はりしふらん。袂衣。竹取。住吉。濱松は今もあり。

此篇は和歌の來歴を説きて人を此道に導かんとするの深切あり。諸曲に古

今の序を引きて歌道を説くものあまたあるは。此曲ふとや其開口を爲すならん。而して其巧拙は諸曲と比較して後にいふべきあり。

江島景

虚無縹渺の界かすかにして。至り難ければ。雲蓬霧茶のすみか空しく名をのみ聞く。尋ねやすく行きやすきは。大樹營に遠からぬ。江の島の形勝。つら／＼舊記を訪ふに。巨靈の神最負と力おこして。そばなていたせる石灘。鹽合細線の道に歩をすゝめつゝ。岩根づたひに攀ぢ上り。四望眼にきはまらず。先づ松端を禮すれば。垂跡をあらはす大弁才。辨才富貴のみふらず。株々の願ひを三つの峯。三天の姿象りて。花に曼茶の春の霞。紅葉は色相の秋の風。かぎらぬ草木の末までも。惠の露をやそ／＼ぐらん。荒磯ぎはの島めぐり。あまたの龍宮殊にあやし。深き御法の底までも。そも揭馬道なれや。斷岸によこたはる船。碇綱を木かけに結びてや。

千瀉をもとむる朝ふぎに。拾ふ袂の玉や如意珠。げにその心の如くふり。或は蒼龍遊を去らべ。或は文魼の落を鳴らすも。八百萬代の糸竹の。妙なる聲にや通ふらん。鯨室に龜鳴きて暮れ行く空の雨そ。いぎ。やがて晴れぬる夕づく日の。紅輪を志づむる青海に。かはりて月は中空の。雲より伊豆の大島。まま／＼見えて彼方は方の。浪間わけ夜船漕ぐ。音を寝どめの浮枕。そも／＼役の優婆塞を。はじめてかしく聞えし。古への代々の。龍象金色の巖岨にして。正に尊神の御影を拜せし。密藏の重寶を納め置きて。利益をほごす東海。浪の白木綿かけまくも。かなだけふくも諸人の。祈る手向になびきつゝ。袖ふきふるゝ追風。神さびまさる瑞籬の。久しき官居の富榮き。春秋をかさねん。

虚無縹渺……仙界の幽遠ふる形容。白氏文集の長恨歌に。山在虚無縹渺間。と見ゆ。○雲蓬霧萃……雲霧の如く有無の間ふる蓬萊宮の意。仙宮の名ふり。○名をのみ聞く……以上は眞の仙界の慕へども至る能はざるをいふ。

○大樹營……鎌倉幕府の事。○巨靈の神云々……此邊の文よみにくき處多し。誤脱ふと有るにや。○そばなて出たせる……龍神ふとの集まりて巖を碎き石を折きなどしつゝ、島を作りしよし。江島縁起に見ゆれば。その事をいふなるべし。○鹽合細線……汐間の細筋のふとよむにや。陸地より島に行く間の道をいふふるべし。○松孺……松立てる島といふ程の意。孺は岸邊の地と字書にあり。○垂跡……本体は佛なるが假に神と現はるゝこと。○三つの峯……願を満つといひかけたり。○三天……佛法にいふ想像界の名。○曼荼……曼荼羅華といふ花。極樂世界ふとにて佛の降らすもの。○色相假に色を現して其衰ふるさまを凡夫に感せしむるの意。○袂の玉……貝の事。○如意珠……昔し八才龍女の釋尊に捧げしものにて。此玉を持ちたれば何事も自由自在になるといふ。○遊……樂器の名。日本のものに非ず。○文魼……魚の名。鳥首魚尾。翼あり音聲の如く。珠玉を出たす。と字書に見

ゆ。○敏室……さめといふ魚の住む處。○役のうばそく。……此島を開きし
行者なり。○浪の白ゆふ……浪を白帯に見ふし。それを懸くるを。かけまく
につけたり。○富榮き……こみながきと讀むにや。

風景あり歴史あり信仰あり趣味あり、讀んで面白く。吟じて有難きを感じず。

夙夜忠

道を傳へ家を起し。名を後の世に留むるは。夙夜の忠を重ねつゝ。かしこき恵み
を仰ぐなり。凡そ夙夜に眠なく、風に髪梳り。風にゆするしてや。曉に出で星に入
り。しばし壁に背ける燈火をかゝぐといへども。圍の床をあなゝめず。閑に枕
をかたづけず。官司の勤にいそがはしく。三度食ををさめず。三度髪をあぐくは。
功臣の忠勤によりてなり。朝政に盡しつゝ。朝に雨露の恩を請け。夕に御物をま
し。霜雪をいたいて。夙夜の功やつもるらん。されば上は三公輔佐の雲の上。影

なびく月の都より。一日の勢ごとく。其品々にしたかひて。辨も縁もいろ
いろに。衣の袖をつらねつゝ。仕へて道に物うからず。掃部寮の筵道。衛士の焼く
火の庭もせに。大官人の朝ぎよめ。塵に交はらわさまでも。夙夜の忠にや備ふらん。
光源氏に仕へし惟光良清は。霞の内の隱家にも。立ちおくる、事ふく。霧の筆の
隔てふく。里をも分かす随ひし。花の宴紅葉の賀。春のあそび秋の興。夕顔の宿花
散里。六條わたりの通路。須磨明明のうらめしかりし旅寐の床。磯間づたひや彼
岸に。年ふる海士の住家までも。みるめの草のかりにても。心に遠ふふし。もふし。
舊臣のすぐれてあはれなりし。ためしの衣の色の深きは。延光の大納言や。願基
の中納言。彼は天曆の古へを忍びつゝ。近臣の服なつかしく。菩提の道の縁こふ
りたれば。夙夜の昔の面影を。古宮の月に思ひ出で。秋の心をいたましめ。淺茅
が露の玉ゆらも。忘るゝひまもふかりける。是皆夙に起き夜半に寐ねざりし。懐
舊の思や切ふりけん。

夙夜の忠……朝早く起き夜遅く寐て忠を盡すこと。○風に髪梳り……
難
苦な事とするさま。○ゆする……湯あみすること。○星に入り……星の見
ゆる時刻になりて夕方に歸ること。○壁に背ける……燈火を壁の方向
くる事ふれど。こゝはそれほどの意味にあらず。たゞ燈の形容詞を見るべ
し。○燈をかゝぐといへども……夜半にも起き居て王事につとむる事。○
宮司……みやづかさご讀む。朝廷に出仕する官吏の總稱。神官の官名と混
し思ふ可からず。○三度食を云々……周公が賢人を朝廷に推舉するため
一度の食に三度も哺を吐き。一度の沐に三度も髪を握りて。面會せしとい
ふ故事。○御物をまじし……誤字らしく思はる。○三公……三大臣をいふ。○
輔佐……天皇を輔佐し奉る高官の人をいふ。○其品々……其位官々々の
意。○緋……五位の人の官服は赤き袍ある故にいふ。○綠……六位の官服
なり。共に官人の内にて卑しき方に属したるものを舉ぐ。○物うからず……

イヤソワにふきの意。たゞ誠意をもて君に仕ふるなり。○掃部寮の……衛
士の……大官人の……皆それ／＼役々に仕へ奉る例を舉ぐ。○光源氏に……
是より世人のよく知りたる物語にて實例をあぐるなり。惟光と良清との
二人は源氏の家臣にて忠義者ふればいふ。○みるめの草の……みるめは海
藻の名。海士の住家に縁ある故に之を出だして。それを刈るといふを假初
にいひかけたなり。○心に違ふふしもなし……少しも主君の意に悖らず従順
をもて仕へしを云ふ。○舊臣の……是より正史上の例をあぐ。○延光……
村上天皇の寵臣なり。崩御の後は生涯喪服を解かざりしといふ。○顯基……
後一條天皇の寵臣にて。崩御の時。之をかふしみて出家せし人なり。○夙に
起き夜半に寝ねざりし……御在世中に忠義を盡して仕ふる事の猶足らざ
りしを悔ゆるならんこの意。
此篇はづめに忠道の重きことをいひ。次に例を近易ふる物語に取り歴史に

引きて其後世までも語り傳へらるゝ事實を擧げ。終に斯かる忠臣にても猶その足らざりしを悔ゆることあらんといひて。人臣たるもの、勸戒とす。歌曲中に此くの如き世道人心に關するものは。前代に未だ見ざりしところ。

山

五天竺國震旦國。浪をへたて、百萬里。其地は何くも知らねども。名を傳へて聞く山々は。鐵國山須彌山。王舍城の耆闍崛山。觀世音の補陀落山。文珠のまします五臺山。悉達太子の修行せし阿私仙人が檀特山。崑崙玄圃響風山。瀑布の泉は天台山。海中五つの神山は。龍伯人につられて。蓬萊方丈瀛州のや。三つの山こそ交りけれ。秦の始皇の宿りしは。泰山五林の松の陰。漢の武帝の登りしは。萬歲呼崇高山。李將軍が瀧山。嚴子陵が富春山。紫容山の白雲銅梁山の翠黛。元和九年の秋

八月上弦。白樂天のあそびして。玉順山ぞゆかしき。我國秋津島には。東山山陰山陽道。國々の名山山又山の青巖。天武天皇大友の皇子を恐れて吉野山に入り給ふ。清和天皇は十善の寶位を振り捨て、水の尾の山に住み給ふ。前中書王の小倉山。惟喬の親王の小野の山。宇治山の喜撰法師。花山の遍昭僧正。室の戸ふかき北山。このみかどの西山。神社のすぐれて尊きは。男山加茂山稻荷山。春日熊野山。靈寺の殊に聞ゆるは。泊瀨山石山比叡山。書寫の山。弘法大師の入定は。紀伊國高野の山の奥。さても東の方にこそ。名高き山は聞ゆふれ。相坂不破の中山。小夜の中山高足山。都良香が記を作る。駿河の國の富士の山。在中將が踏み分けし。宇津の山邊の葛かへて。足柄箱根の山こえて。道ある時のかしこきに。鎌倉山の紫えゆく。君が御代こそめでたけれ。龜谷巨福山。大樹營の幕府山。花のにはほひも紅葉も。いつも常磐の色ながら。嵐の聲も月かげも。いく萬代を契るらん。名高き山の名と山の故事とを以てつづけたるのみ。別に面白き作といふに

はあらねど。今日も斯様の曲を作り試むる人あらは。兒童の地理と歴史とを知る一助にもならんか。思ひよれるまゝに撰び載せたり。諸曲中にも斯くの如く。或る事物に關する名詞を集め綴れるものあるは。是等の作に起りたるふれど。其無味を變じて有味とふせるは彼の長所なり。讀者もし胸中に此曲を留めおきつゝ、彼曲に移り試みば。多くはその優劣を明かにせん。

草

聞くもやさしきさいなつま。春は緑と夏野の草の葉をしげみ。秋は百草のいろいろ。冬はさびしき枯葉まで。とりとゝふる中にも。先は雪間の若葉卵杖つき。摘まゝほしき春日野の。飛火の野守出で、見よ。すぐろの薄つのごめは。駒いはゆふりや栗津野に。ほごろと折るは早蕨よ。取りながへたるは相撲草。あまのこの

冬や是ふらん。御生所の葵のかづらと。五月に軒端に逢ふ菖蒲な。五月雨なればしほたねぬ。いつ刈り干さん真蕪草。小菅の笠のひまもがふ。早苗を急ぐ御田屋守。若苗採らん早乙女。かの岡に草刈る男しかな刈りそ。有りつゝも君が来まさん。御馬草まうけんになんやふ。奥山の岩もごに。菅根ふかめて思ふ心よ。君がため色どりにする月草。うつろひぬるかいつのまに。人の心は秋の露の。いろゝごに置けばこそ。千草も紐どけ。咲いたる花を手に取りて。かき敷ふれば七草の花。尾花葛花ふでしこの花女郎花。藤袴あさかほ。たゞかりそめに結ぶ契りかは。小野の草伏し草まくら。あだなる鴟の草ぐき。壁に生ふる草の名の。いつまで草のいつまでか。古屋の垣にしげらん。露草しはく空しければ。又げにさは。草顔淵が巷に滋かんふるものをふ。何とかな忍ぶにはあらぬ草の名に。軒端にしげるわびしき。かきたえぬるか水壁の。岡の真葛うらみても。やゝ枯れまさる冬草。

さいたづま……春の若艸をいふ。○卯杖つき……正月初卯の日に小さき杖の形を作り人に贈りて祝ふ事。中古の風あり。○春日の、云々……古今集の「春日野の飛火の野守いで、見よ今いくかありて若菜つみてん」を引く。○すぐる……春の焼野の薄の末の黒さを云ふ。○つのがめば……芽の出そむること。○駒いばゆ……野飼の春駒のいふこと。○ほごろ……藤のホウケたる事なるを。こゝには意味をちがへて用ひしが如し。此時代の歌文は左様の誤用つねにあり。○すまふ草……莖のことすまふといふによりて取りの文字をおく。○あまのこの冬や……此句は意味明亮ならず。誤字にや。○御あれ……加茂祭のこと。○葵のかづら……葵を人々の髪にかくること。○かの岡に云々……和漢朗詠集の歌を引く。旋頭歌あり。結句は「君が来まさん御草にせん」とあり。○色どりする月草……月草の花は染草に用ふる故にいふ。但し此花にて染めたる衣は色のさめやすきものなるが故

に人の心の變じ易きになとへたり。○秋の露の云々……古今集に「秋の露いろくごごにおけばこそ山の木の葉の千種ふるらめ」とあるを引く。○咲いたる花を云々……萬葉集山上憶良の歌に「秋の野に咲きたる花をおよび折りかき數ふれば七草の花」秋の花尾花葛花などしこの花女郎花また藤袴朝顔の花」とあり。○鴈の草ぐさ……鴈が草葉をくゞり飛びあるくを云ふふるを。草莖の意として草の名の如く用ひしにや。○壁に生ふる……壁生草と書きてイツマデグサと讀む故にいひて。何時までの序とす。○露草しばし云々……和漢朗詠集直轄の文に。露草屢空艸滋顔淵之巷。藜藿深鎖雨濕原憲之樞」とあり。○かき絶えぬるか……水莖は手跡の事ふれば其書信の絶えたるよしあり。○水ぐさの……下句には岡の枕詞としてつゞきたり。○うらみても……葛の葉は秋風に吹き裏がへさるゝ故に裏見の意を恨にかけていふ。○やゝかれまさる……人情の枯れたるよしを含みて

戀のこゝろをあらはしたり。
是等の曲に至りては、随分無味混雜に。詩歌の句を綴り合せたるを見る。後世の琴唄長唄ふどに趣意ふき文句を綴り集めたる弊は、こゝに萌したりといはんも無理には非ず。

第二種 謠曲

謠曲は始め曲舞くまと稱へて短き歌曲の流行せしが、遂に前段後にを作り加へふとして足利氏の初期に完全のものとなりたるあり。然れども其全曲すふはち一番の謠は、中に歌曲として歌ふべき部分ふらぬ詞の掛合なども交りたれば、こゝには短篇の歌曲として用ふべき妙處を撰出せり。大に文字上に味はふべき佳曲名篇は、そろく、此種類中に手

をあげて我々を招きつゝ有る如し。

近江八景

あれに見えたる比良の山。小松が原に吹く嵐は。山市さんしの晴嵐もかくやらんと思はれ。真野の入江の洲崎の真砂は。雪かと思えて江天の暮雪にこころあらず。あらおもしろやと見る程に。いこゝ心の澄みわたる。堅田の浦の釣舟の。沖より家路にいそぐをば。遠浦の歸帆かどうちふがめ。雲の一むら残れるは。よるの雨の名残か。さて比叡山の鐘の聲を。遠寺の晚鐘かどうち聞き。それ唐崎の洲崎に。翅を垂るゝさほ。平砂の落雁にこれなぞらへ。さて洞度の月には。鏡の山をたごへたり。誰を漁村の夕照に。釣垂るものと思ふべし。釣たるゝものと思ふべき。それ唐崎の……その文字おだやかならず。家字にやあらん。明和年中親世九章の改正本には「志賀平崎の」ごあり。○翅を垂るゝさほ……此さほも

解しがたし。驚などの誤にや。明和本には「鷗」とあり。○近江八景は支那の瀟湘八景に擬したるものなるが。此曲の出来たる頃は今のやうに石山秋月、堅田落雁ふど、一定せずして。人々の適宜に之を見立てたるもの、如し。瀟湘の八景とは。洞庭秋月。江天暮雪。遠浦歸帆。漁村夕照。瀟湘夜雨。平砂落雁。遠寺晚鐘。山市晴嵐これなり。是等は猶いまだ宴曲と其相距る遠きを見ず。而して其雅趣はこれより一歩々々を加はり來るが如し。

鼓の瀧

そも／＼春の夜の一時。花に清香月せいじやうげつにがけ。惜まるべしや時もげに及ぶかたふき上旬の空。色も長閑けき春の日の。流にひかる、盃の。手まづさへさる心かふ。花前に酒を酌んで。紅色を飲むかや。げに面白や盃の。光も廻ぐる春の夜の。有明あきくら照りまさり。天花に酔へりや。流水も雪なり。げにあくがる、春ふれや。

我ご心にこそはれて。都ははるるごと。路にかすみのうす衣。日もゆふぐれば過ぐれども。其まゝに長居して。花に名残は有馬山。鼓の瀧に時うつり。宿を花に借るも斯く。猪名野もちかゝりき。床は露の筈枕。深山がくれの曉に。遠寺の鐘もかすかにて。深洞に風すぼく。老檜悲しむ聲も袂をうるほすや。猿子をいだいて清漳のかけにかへりぬ。鳥花をふくんで碧巖の前に落つふるも。今更思ひ知られたり。花見すはいかでか。此山に一夜あかさん。

春の一時云々……宋の蘇東坡の詩に。春宵一刻值千金。花有清香月有陰。とあるを引く。○上旬……三月上旬なるべし。○流にひかる、云々……朗詠集雅規の詩句に。牽流過手先遮とあるを引く。○有明櫻……花の名。○うす衣……衣の紐といふを「日」といひかけたなり。○名残は有馬山……名残は有りといひかく。攝津の名所あり。○風すぼく……すごくの誤にや。すぼくは狹隘ふる意の詞あり。

春色人を浮き立たするを以て筆を起し。夜氣肌を侵すに至りて曲を終り。而して彼も是も花のめぐみふるよしをいひて結びたり。おのづから是れ泰平の聲遊客の情。

妻戸

比叡山延暦寺の座主。法性坊の僧正とて。貴き人おはします。この人は三伏の夏の夜。五更もいまだ明けざるに。九識の窓の前十乗の床のほごりに。瑜伽の法水をたゝへて。三密の月をすまし見るに。妻戸をほごゝさなゝく聲すふり。誰ふるらんと思しめし。戸をひらき見給へば。過ぎにと二月や。後の五日に世を早うすと聞えし。管丞相にておはします。ふしぎやとおぼしめし。請入奉り。深夜の御光臨。何事にかはと有りしかば。管相こたへて宣はく。にされる世に生れて。無實の説言力なし。説言のあなを報せんため。雷とふらん時。禪室ばかりこそ。成

光りてなく候へ。いかふる勅使ふりとも。内裏に参り給はずは。生々世々に此恩を。ふどかは報せざるべき。此御歎きは申しても。餘りあるべし。いかなる勅使なりとて。二度までは参るまじ。勅使三度に及ば。普天の下卒土のうち。王土にあらすと云ふ事ふし。さのみはいかゞと宣へば。管丞相の御色は。この外に變はりつゝ。折節御前に。柘榴を置かれたりしを。おつ取り口に含んで。はらゝとみくたき。妻戸にくわつとはさかくる。あかき柘榴は。忽に。火焰となつて。妻戸に。三尺ばかり燃えあがる。僧正見たまひ。洒水の印を結んで。鍍字の明を誦せしかば。火鍍は消えにけりやふ。その妻戸は山上の本坊に。今も有りとききとある。

管公の怨靈比叡山に至りしといふ俗説を作りしふり。○三伏……盛夏の時節をいふ。是より三伏五更九識十乗などと數字を重ねて用ひたり。○五更……曉四時の頃。○九識……一に眼識二に耳識三に鼻識ふどゝいふやうの事を修行するをいふ。○十乗……是も十箇條の佛法上の觀行なり。○瑜伽の

法水……佛法の清浄にて充滿せるを水に譬へいふ。○三密の月……身密
 語密意密といふ三件の曇なきを月に譬ふ。以上は僧正の佛法修行しつゝ有
 るを云へるふり。○深夜の御光臨……是より僧正の詞。○報せざるへき……
 以上丞相の詞。○此御蒙きは……又僧正の詞。○洒水の印……鍍字の明……
 ……共に佛法の祈念法。
 記事にて斯くの如く活動の妙を見るは前代に得がなかりしもの而して後
 代の大成を招きつゝ有るものなり。問答の勢迫りたる處に發言者を言はざ
 るふと殊に力あるを覺ゆ。

隱岐院(上)

承久三年七月八日の日。時氏鳥羽殿に參りて申しけるは。世はかうにて渡らせ
 給ひ候ふふり。御出家ふくては叶ふまじと。情なく申し上ぐれば。力及ばせ給は

ずして。やがて御ぐしをおろされたり。綺羅の御姿を引きかへて。衲衣を御身に
 奉り。御似せ繪をかゝせ給ひて。七條の女院に參らせらる。女院御覽下あへず去
 て。修明門院と御同車有つて。鳥羽殿に御幸ふらせ給ひて。庭上に御車を立てら
 れければ。一院も御すなれをかゝけて。御顔ばかりさし出だして。唯とくく御
 歸りあれとばかりにて。やがて御すなれをおろされけり。程なきひとめの御契
 り。御身も心も燃えこがれ。煙の中のくるしびも。かくやと思ひ知られたり。さら
 だに悲しがるべき。初秋の夕暮に。あはれすいむる折節もあり。秋の山風吹き
 落ちて。御身にこそは。さみわたれど。隱岐の海のあら磯の。新島守は誰やらん。

後鳥羽院の北條氏に惱まされ給ひし事を作れるふり。○時氏……北條泰
 時の長子。○鳥羽殿……後鳥羽院の御所。○衲衣……僧服ふり。○御似せ繪
 ……御肖像なり。藤原信光筆を執りたり。○七條の女院……後鳥羽院の御
 母。○修明門院……順徳天皇の御母。○一院……此時後鳥羽土御門順徳の

三院ありし故に第一院の後鳥羽上皇を申す。○ひとりの御契り……外見を憚らせ給ふをいふ。○新島守……院の御身を新任の島守に比して「われこそは新島守よ隠波の海の荒き汐風心にて吹け」とよませ給ひしに候りていふ。

同(下)

御出家の後はおくても鳥羽殿に。わならせ給ふべきやらんと。御心安く思召さるゝ所に。時氏又参上て。隠波の國へ流し奉る。御供には男女以上五人あり。前躰の警衛もふく。百官の扈從するもふし。庶人の旅にこそあらず。道すがらの御有様。誠にあはれなりけり。扱も此島にわたらせ給ひて。あまの郡かりたの郷と云ふ所に。御座をかまへたりければ。唯海士人の住家にとこならず。昔は蟠洞紫山のうちにして。春秋を送り迎へて。樂しみ盡くる事なし。今は苦屋のひさし蘆垣

か。月もり風もたまらねば。晝もつらし夜ももうし。女御更衣の其拜所もなく。月卿雲客の拜趣もなし。只懐舊の御涙に。まどろませ給ふ夜半もなければ。この涙唯このもどに。立ちくる心地して。須磨の浦の昔まで。おぼしめし出ださる。

蟠洞紫山……仙宮をいふ。即ち院の御所を指す。○須磨の浦の……源氏物語を引きていふ。光源氏左遷の時のことあり。○其拜所……この涙……このにそのといひこのといふ詞は無くてもよきに似たり。裏曲には常に詞を添ふる意味なき詞に。この「あの」ふといふ文字を用ふれば。其餘習が本文とありたるにやあらん。

上篇は御出家にふらせ給ふ事をのへ。下篇は島に遷らせ給ひて後をいふ。字々悲哀句々憤慨。いかでか此曲を歌ふものをして。勤王討賊の志を起さしめざるべき。

飛鳥川

五月雨に物思ひをれば時鳥。夜深く鳴きていつち行くらんと。よみし心も今更
に。身に白糸の夜どなく。晝ともわかであだし世の。いつまでとてかながらへん。
思へばあはれ胡蝶の夢に。遊ぶぞ今日のうつゝふる。御田屋守今日は五月にふ
りにけり。急げや早苗老いもこそすれ。げにや五月雨の。晴れぬ日数もふり行く
に。あすさな云ひそ飛鳥川の。水田の深縁。立ちつれいさや植ゑうよ。そもく
はくの。田を作ればか時鳥。四手の田長をあさなくよぶと。詠せしも誤ふり。四
手の山田の時過ぎて。此土にきたり聲たてし。程時すぐる世の中の。教を志る故
に。時の鳥とは申すふり。五月山梢を高め時鳥。鳴く音空なる戀やする。我も戀し
き縁子の。行くへもあらで足引の。山路に迷ひ里に出で。國々浦々わたる日の。
つもる三年の春過ぎて。夏もはや五月雨の。ふり分髪の玉かづらの。玉かづら。かゝるわざは
いつか身に。馴衣袖ひちて。いさく早苗とらうよ。

行方去られぬ愛兒を戀ひつゝ、賤の女が田植の歌に感慨を述べたるなり。○
五月雨に物おもひをれば云々……古今集の歌。○身に白糸の……身に知
らるゝを白糸にいひかけ。糸をよるを夜にかけたなり。○御田屋守云々……
後拾遺集好忠の歌あり。○いくばくの云々……古今集の歌。○四手の山田
の……時鳥に四手の田長の異名あり。人の死してゆく冥途に死出の山の
名あり。この二つの意を持ちて見るべし。○此土に來り……時鳥は死者の
魂の爲りたる鳥といひ傳へたり。よりにて此娑婆世界に來ること。○程時す
ぐる……田を植うる時節の過ぐるを教ふるの意。それより及ぼして萬事
の時にあひ度に叶ふ教を司るの意に用ひたり。而して句中にホト、ギスの
文字を隠したり。○五月山云々……古今集貫之の歌。但し結句は「戀もする
かふ」とあり。○ふりわけ髪……童女の髪をいふ。こゝは五月雨降のるとい
ひかけ。又髪の玉かづらとつゞくべき間の道具におけるのみ。○玉かづら…

……玉にて装ひたる髪の飾ふり。懸かるといふべき序詞。○袖ひちて……
ぬらしてといふに同じ。

時にあひたる古歌を吟じて物思ふ心を示し五月雨の句によりて田植の時
ふるを感ず。時鳥より戀の古歌を生ず。その戀轉じて親子の愛に落ち来る。
順序あり變化あり。然も自然にして無理なきところ。やうく進みゆく當
時の文學を見るべし。

迎陵嘯迎

夫れ迎陵嘯迎は。卵の内にして産諸鳥にすぐれ。鶯といふ鳥は小さけれども。虎
を害する力あり。爰に河津の三郎が子に。一方箱王とて。兄弟の人のありけるが。
五つや三つの頃かとも。父を從弟に討たせつ。既に年ふり日を重ね。七つ五つ
になりしかば。いどけなかりし心にも。父の敵を討たはやと。思ひの色に出づる

こそ。けにあはれにはおぼゆれ。ある時兄弟は。持佛堂に参りて。兄の一万香を煮
き。花を佛に供すれば。弟の箱王は。本尊をつくと守りて。いかに兄御前さ
いしめせ。本尊の名をば我敵。工藤と申し奉り。劔をひつとけ繩を持ち。我等を脱み
て。立たせ給ふが僧ければ。走りかゝりて御首を。打ち落さんと申せば。兄の一万
これを聞きて。いわけふやいかなる事を佛をば。不動と申し敵をば。工藤といふ
を知らざるか。扱は佛にてましますかと。扱いたるかを鞘にさし。ゆるさせ給へ
南無佛。敵を討たせ給へや。

是は望月といふ謡曲の中にありて。盲人が歌ふ昔我兄弟の一曲ふり。○迎
陵嘯迎……佛の浄土に住みて美聲もて音楽を奏する鳥。○五つや三つの…
…一方は五歳箱王は三歳の意。○さては佛にて……箱王の詞。
變化自在語勢緩急ありて其進歩せしこと前例の妻戸の上に在るを見る。

清 經

かゝりける處に。長門の國へも敵むかふと聞きしかば。また船に取り乗りて。いづくともなくおし出だす。心の内ぞめはれなるげにや世の中の。うつる夢こそ。誠なれ。保元の春の花。壽永の秋の紅葉とて。散々にふり浮ぶ。一葉の船なれや。柳が浦の秋風の。追手がほふる跡の波。白鷺のむれぬる松見れば。源氏の旗をなびかす。多勢かど肝を消す。こゝに清經は。心にこめて思ふやう。さるにても八幡の御託宣あらたに。心魂に残ることわり。まこと正直の頭にやどり給ふかど。唯一筋に思ひごり。あぢきふやとても消ゆへき露の身を。猶おきかほに浮草の。波にさそはれ舟になよひていつまでか。憂き目を水鳥の。沈みはてんと思ひきり。人にはいはで岩代の。待つ事ありや有明の。月にうそぶく氣色にて。船の舳板に立ちあがり。腰よりやうでう抜きいだし。音もすみやかに吹きふらし。今様をうたひ朗詠し。來し方行く末をかいみて。終にはいつかあだ波の。歸らぬは古へ。

とまらぬは心づくしよ。此世とても旅ぞかし。あら思ひ残さずやど。よそめにはひなぶる。狂人と人や見るらん。よし入は何とも。みるめを假の夜の空。西にかたむく月を見れば。いざや我もつれんど。南無阿彌陀佛彌陀如來。迎へさせ給へど。唯一聲を最期にて。舟よりかつばと落汐の。底の水屑と沈みゆく。うき身の果ぞ悲しき。

左中將清經の西海にて入海せし一段を作れるあり。○追手がほふる……源氏の旗を……敗將の風聲鶴唳に驚くさまをいへるなり。○憂き目を……見るを水にいひかけたり。○岩代の……いはでいは」と同音を重ねて松を待つにいひかけたり。岩代の松は紀伊の國の名所。○ありやありあけの……是も同音を重ねてエミとす。○やうでう……横笛の字音を詠りていふ源平時代の詞。○みるめを假の……よし入は何とも見るべし「みるめ(海藻)を刈る」假の世「夜の空」と一ツ送りにいひかけを用ひてつゞけたり。○いざ

や我もつれんこと……我も月と共に西方極樂世界に行かんことあり。

鶴

さて近衛の院の御在位の時。仁平の頃ほひ。主上夜なく御惱あり。有驗の高僧貴僧に仰せて。大法を修せられけれども。其しるし更に無かりけり。御惱は丑の刻ばかりにてありけるが。東三條の森の方より。黒雲一村立ち來つて。御殿の上におほへば。必ずおびえ給ひけり。すなはち公卿詮議あつて。定めて變化の者なるべし。武士に仰せて警固あるべしとて。源平兩家の兵を撰せられける程に。頼政をえらび出だされたり。頼政其時は。兵庫の頭とぞ申しける。頼みたる郎等には猪早太。唯一人召し具したり。我身は二重の狩衣に。山鳥の尾にてはいたりける。尖矢二筋波藤の弓に取り添へて。御殿の大床に伺候して。御惱の刻限を。今やいそ待ち居たり。さる程に案の如く。黒雲一村立ち來り。御殿の上におほひ

たり。頼政きつと見上ぐれば。雲中に怪しき者の姿あり。矢取つて打ちつがひ。南無八幡大菩薩と。心中に祈念して。よつびきひやうと放つ矢に。手答へしてはたと當る。得たりやおうと矢叫びして。落つる所を猪早太。つと寄りてつがひさまに。九刀を刺いたりける。扱火を燈し能く見れば。頭は猿尾は蛇。足手は虎の如くにて。鳴く聲鶴に似たりけり。恐ろしふんども。恐ふる形なりけり。

源三位頼政の禁中にて怪鳥を退治せし事を作れるふり。○はいたりける…

…矢を作ること。○愚ふ……いふまでもふきの意

精粗緩急よろしきを得て。頼政の風采。早太の勇力。怪鳥の異状を目前に畫かき出だせり。謂はゆる音調あるの畫。彩色あるの詩。

げにさぞふ

げにさぞふ處から。人跡たえて荒れはつる。祥蓮生かるかやも。みだれあひたる。

浅茅生や。袖に朽ちにし秋の霜。露わけ衣来てみれば。昔を残す古塚に。朽木の柳。枝さびて。影踏む道は。すゑもふく。風のみ渡るけしきかな。

遊行柳の中の一章あり。遊行上人が名木の古柳に對する時の感情を知るべし。○袖に朽ちにし云々……新古今集に「浅ぢふや袖に朽ちにし秋の霜わすれぬ夢を吹く嵐かな」とあるを引く。○露わけ衣……霜の宇より露を呼び出だし。露分衣を着るといふを來てにかけたり。○影ふむ道は云々……柳の影を踏みゆく下道は寂寞として物も見えず。唯見ゆるは風の姿のみとなり。

満目蕭條な、朽木の柳の柳の力ふげに立てると。枯れはてし草葉の風に送らるるを見るのみ。古木の精靈まさに現はれんとして吟聲有無の間にまづ響く。上人の念珠いまや袖中に在つて和せんとする。

ほのみえて

ほの見えて色づく木々の初瀬山。風もうつろふ薄雲に。日影もにほふ一しほの。さぞふ氣色もかく河の浦わの詠めまで。げにたぐひなや面白や。川音きこえて。里ついき。おくものふかき谷の戸に。つらなる軒を絶々の。霧間に残す夕べかな。

玉葛の曲中にありて初瀬の景色を形容する一章あり。○木々の……葉の文字を初瀬にいひかけたり。○つらなる軒を云々……夕霧の絶間より家々の見えたるをいふ。

初瀬の秋色。あがきつくされて身にしむ心地す。夕日のくれふぬふる。薄霧のほのぐらき。或は之を寫すに薄墨を以てし。或は之を裝ふに水彩を以てす。すべし何ものかははれあらざらん。

景清

一門の船の内に。肩をふらへ藤を組みて。所せくすむ月の。景清は誰よりも。御座船にふくて叶ふまゝ。一類その以下。武略さま／＼に多けれど。名を取扱の船にのせ。主従へなてなかりしは。さも美まれたりし身の。麒麟も老いぬれば。驚馬に劣るが如くふり。

悪七兵衛景清の末路を悲しみて作れるふり。○一門の云々……平氏安徳天皇を擁し奉りて西海に奔りたる時の事ふり。先づ景清が平氏中に信任せられ居たるを云ふ。○所せく……船中究屈ふるを云ふ。○すむ月の……船中に住むを澄む月にいひかけたり。○名を取扱の……景清殊に名譽を取るといひかく。

一盛一衰たちまちに變りはつる人の身を述べて感慨かぎりなし。歌曲の氣鋭いよ／＼光明を放ち來る。

をしかふく

牡鹿ふく此山里とながめける。嵯峨野の方の秋の空。さこそ心も澄みわたる。片折戸を志るべにて。明月に鞭をあけて。駒を早め急がん。賤が家居の假ふれども。いやと思ひいかに。駒をかけよせかけよせて。ひかへ／＼聞けども。琴ひく人は無かりけり。月にやあくがれ出で給ふと。法輪に參れば。琴こそ聞え來にけれ。峯の嵐か松風か。それかあらぬか。尋ねる人の琴の音か。樂は何ぞと聞きたれば。夫を想ひて戀ふる名の。想夫戀なるぞうれしき。

高倉天皇の勅を奉りて源仲國小督局を嵯峨に尋ねる事を作れるふり。○牡鹿なく此山里……源氏物語に「をしか鳴く秋の山里いかならん小菟が露のかゝる夕暮」と有る歌を引けるふるべし。○賤が家居の假ふれど……假初に作りし疎屋のみ多くして局の住みむべき様も見えぬとの意。○法輪……

…法輪寺のこと。○樂は何ぞと……源平時代の琴は唄を引くに非ずして雅樂に属したるものなれば云ふ。○想夫戀……樂曲の名。すなはち天皇を戀ひ奉る意味に聞ゆるが感ふかきなり。
優美にもあり物さびしくもあり。仲國の風采小音の姿色。明月の光と相映するを覺ゆ。

汲むや心

汲むや心もいさぎよき。加茂の河瀬の水上げ。如何なる所なるらん。何處とい岩根松が根凌ぎ來る。瀧つ流れは白玉の。音ある水や貴船川。水も無く見えし大井河。それは紅葉の雨と降る。嵐の底の戸無瀬なる。波も名にや流るらん。清瀧川の水汲まば。高嶺の深雪解けぬへき。朝日待ち居て汲まうよ。汲まぬ音羽の瀧波は。受けて頭の雪とのみ。戴く桶も身の上と。誰も知れ老いらくの。暮るゝも同じ程

なき。今日の日も夢の現ぞと。うつろふ影は有りながら。濁りふくぞ水むすぶの。神の心汲まうよ。神の御心汲まうよ。

加茂といふ曲の中にありて。里女の鴨川の水を汲みつゝ歌へる一段なり。
○何處ぞか……言はんといふを岩の字にかけたり。○白玉の……瀧つ瀬の潔白なるを見なてゝいふ。而して玉の緒といふを音のオの字につゞけたり。
○水も無く云々……後拾遺集定頼の歌に「水もなく見えこそわなれ大井川峰の紅葉は雨と降れども」と有るを引く。○波も名にや……名所として聞ゆるの意を波の縁によりて流るといへり。○清瀧川の云々……新古今集西行の歌に「降り積みし高嶺の深雪解けにけり清瀧川の水の白波」とあるを引く。○朝日待ち居て……朝日に消えて流るゝ雪水を待ちての意。○汲まぬ音羽の云々……古今集に「落瀧つ瀧の水上年つもり老いにけらしも黒き筋ふし」とあるに本づきていふ。瀧の白さを白髪に見ふし更に轉じて我身

上におこしたるふり。○いたゞく桶……水汲女の頭に桶をいたゞくは昔の風ふり。頭に雪を戴くの意味よりいひかけたり。○身の上……老の忽に來るもよそ事ふらず。今に我身上に及ぶぞこの意を。桶を頭上に戴くにかけていふ。○夢のうつゝ……夢中の現在に過ぎ去るの意。○うつろふ影……日の西に移ること、水桶に映する事を兼ね。○水むすぶの……水を結ぶを神名にかけて云ふ。むすぶの神は天地間萬物を主宰する神。先づ鴨川の水を結ぶにつきて其水上を尋ね兼ねて縁故ある名所と古歌とを吟じ出だせり。貴船といひ大井といひ戸無瀬といひ清瀧といひ音羽といひ。彼を思ひ此を思ひつゝ水汲む業に餘念ふき様。愛すべし喜ぶべし。水既に桶に満つ。一轉して人生の無常ふるを觀し。再轉して神慮の長久ふるを頼みつゝ歸路に向はんとす。敬すべし慕ふべし。是等の曲を宴曲の山づくし草づくしなどに比する時は。其方法あるひは似たる處あれども。其意匠

の歸する處は同じからず。見るべし彼は單に集めたるのみにて。此は集めて而して收結する精神の有ることを。

河原おもて

河原おもてを過ぎゆけば。いそぐこゝろの程もふく。車大路や六波羅の。地藏堂よと伏しをがむ。観音も同座あり。關提救世の方便あらたに。たらちねを守り給へや。げにや守りの末すぐに。頼む命は白玉の。愛宕の寺も打ちすぎぬ。六道の辻とかや。實に恐ろしや。此道は。冥途に通ふふるものを。心ぼそ馬部山。煙のすゑも。うす霞む。聲も旅雁のよこたはる。北斗の星のくもりなき。御法の花も開くふる。經書堂は是かごとよ。其たらちねを尋ねなる。子安の塔を過ぎ行けば。春のひま行く駒の道。はや程もなく是ぞこの。車宿り馬ごめ。いより花車。おりの衣は。りまがた。志かまの。ちろ路清水の。佛の御前に念誦して。母の新誓を申さん。

熊野曲中の一段なり。平宗盛の愛妾熊野といふもの。老母の病危篤なりとて暇を乞へどもゆるされずして。心ならずも清水の花見に従ひゆく途中の縁ふり。○車大路……来るを車にいひかけたり。五條橋を渡りて真直に行く大通り。○観音も同座あり……地藏堂の内に観音も並べ祭りたれば云ふ。○蘭提救世……佛法不信の悪人をも救ひたすくる慈悲を云ふ。○ならちね……母のこと。悪人をさへ救ひ給ふ観音ふればまして母の身を安全に守り給へとあり。○げにや守りの末すぐに……観音の守りを頼むといふを母の命を頼む事にいひかけ。その命のいつまでたもつか知られぬを憂ふる心につまげなしたるなり。○白玉の……「命はまらぬ」「まら玉の緒」「おたぎ」といふやうにいひかけたなり。○六道の辻……冥途にある辻の名と今過ぐる處の名と同一き故にいふ。○馬部山……火葬場ふれば烟とつまげたり。○聲も旅雁の……音聲に召律といふ事あれば聲も召といひかけた

り。召は陰の音なればおのづから哀しみを帯ぶるに用ふ。旅雁は故郷を離れて旅なる雁ふれば熊野の身上にあたり。○北斗の星……春の躰雁は北方として行くものなれば北の字を受け。北斗星の曇ふきを佛法の明なるに譬へて頼みかけたなり。朗詠集の北斗星前横。北斗より来る。○御法の花も云々……法華經の文字を隠して用ひたり。○子安の塔……子の字あるを以て自身の上にあて母を思ひ出すなり。○春のひまゆく……人生の早く、過ぐるを白駒隙を過ぐるが如しといへば。清水に行く道の早きよしをも兼ねていへるなり。○車やどり……馬とよめ……共に清水にあり。○おりぬの衣……車をおり居るといふを織の字にかけて衣とつまげたり。○はりまがた云々……「衣張り」「播磨瀉飾磨」「飾磨の裾」「徒歩路來」「きよみづの佛」と毎句いひかけを用ひたり。裾はカチンとよみて播州飾磨郡より出づる染物。

目に見耳に聞くもの盡く母を思ひ病を憂ふる種ならぬはなし。春風は車を吹けども天地たゞ涙をもて満たさるゝのみ。景と情と兼ね味はるゝものは謠曲中頗る多しといへども。此曲の如きは亦これ傑作中の傑作といふべし。

室の海

室の海。むろのうみ。波ものどけき春の夜の。月のみふねに棹さして。霞む空は面白やな。霞む空はおもしろや。梅が香の。梅がいの。磯山遠くにほふ夜は。出で船も心ひく。花ぞ綱手ふりける。此花ぞつふてふりける。

室君の曲中にありて。室の遊君が舟に棹さしつゝ歌ふ曲あり。○月のみふねに……月夜に舟を浮ぶるの意。月を舟に譬ふる事ある故にかくつゝけたり。○出で船も心ひく……出で舟の心をも花が引きとむるの意。○花ぞ綱

手……花は心を引き綱は舟を引くものふれば譬へいへり。

花鏡郁月朦朧。棹歌一曲とほくらちかく聞えて美人雨三見えつ隠れつ舟を浮べ来る。字々すべて想像。言々ことごとく管絃。

花の都

おもしろの花の都や。筆に書くとも及ばず。東には祇園清水。落ちくる籠の音羽の嵐に。地主の櫻はちりちり。西は法輪嵯峨の御寺。廻らば廻れ水車の輪の。りせんせきの川波。川柳は水にもまるゝ。志だり柳は風にもまるゝ。ふくら雀は竹にもまるゝ。都の牛は車はもまるゝ。茶臼は挽木にもまるゝ。げにまこと忘れたり。ごよ。ごきり。ごは放下にもまるゝ。ごきり。ごの二つの竹の。世々を重ねて。うち治まりたる御代かふ。

放下僧とて一種の僧体にて歌うたひつゝ物乞ひあるくものあり。それが歌

へる一曲なり。○音羽の嵐……清水のうしろに音羽の瀧といふあり。その山を音羽といふ。○地主の櫻……地主権現の社は清水観音の境内にあり。○まはらばまはれ……寺めぐりする事を水車のまはるにいひかく。○水車の輪の……臨川寺にありて有名なり。輪の字音リンふるを繰りかへす意にてリセンとつゝけたり。○リせんせき……臨川寺の前の井關をいふ。○川柳は云々……次のもまるゝの詞をいはんため種々の物を引きて興とせしなり。○こきりこ……放下の手に持ちて藝をする道具。竹にて作りなればアヤヲリノタケともいふ。○二つの竹の……竹の節と節との間をよといふによりて世々にかけたり。

都の名所をふらべて榮花の春をしめし。終に我持つ竹に就きて泰平の祝言を述べ。おのづから色あり香あり實ある歌曲の体裁。

第三種 狂言小歌

狂言は謡曲と共に並び行はれたる滑稽的の作ふり。其中に歌曲として歌はるゝもの數種あり。却つて真面目の謡曲にもまして當時の俗語風俗等を窺はるゝこと少なからず。むしろ當時の俗曲童謡などの類として味はゞ面白かるべし。

小山伏

京からくだる小山伏。肩にからかさお手に珠數。腰に螺の貝。袂に戀の玉章。お客僧うけ給ふ。柴垣ごしに物問はう。

當時山伏の見かけと行と反對ふるを識れるに似たり。

宇治のさらし

宇治のちらしに島にすまき。立つ浪をつけて。はんま千島の友乎ぶ聲は。ちりちりやちり〜。ちり〜やちり〜と。友乎ぶところに。島かけよりも船の音が。からり〜りからり〜り。と。いぎいだいて釣りする所に。釣つた所が。はあ。おもしろいこの。

鳥の聲船の音すべて歌に入り来る。たゞ何となく古雅にして風韻あるもの。或は催馬樂より出でたるかの面影あり。

七つになる子

七つにふる子が。いたいけな事いうた。殿がほしと歌うた。そも扱もわごりよは。誰人の子なれば。定家葛の離れがたやの。離れがたやの。川舟にのせて。つれておどやるにや神崎へ。神崎へ。そも扱もわごりよは。踊りごうが見たいか。をどりごうが見たくば。北嵯峨へおどやれの。北嵯峨のをごりは。つゝら帽子をしやんとし

て。踊る振りがおもしろい。芳野初瀬の花よりも紅葉よりも。戀しき人は見たいもの。や。ごりよ。おまわりやつて。ごう下向めされ。ごがなはいちやがおひまごりよ。

いたいけふ……可愛らしきといふ程の意。○わごりよ……御身といふに同じ。○定家かつら……式子内親王の定家卿を思ひ給ふ心の一念疑つて葛となり。いつまでも此世に這ひ纏はるゝに依りて定家かつらと名づけたりといふ俗説の。當時に行はれしかば。離れがたき事の譬にいへるなり。○つれておどやるにや……つれて行き給ふならばの意。○神崎……攝津の國にて遊君ふどの住みたる繁華の地。○躍りごうが……茶の湯連歌など廻り持の集會の捲當番にあたるをトウといふは當時の詞なり。當の字ふるへし。是よりうつりて。をどりごうとは躍りの催しといふ程の意味にや。○ごりよ〜おまわりやつて……處々御参り有つての意。○ごう下向めされ……速に歸

り給への意。○ごがをばいちやがおひまうしよ……いちやば女の名。ごは
 七つ子の乳母などの類ふるべし。其遊びあるきを両親ふごに咎められたら
 ば其罪は此いちやめが引き受けておわび申さんごふり。
 七つ子が思ひもよらぬ事をいうた處に滑稽の妙あり。而して拍子に乗り口
 にまかせて譯も無き事を歌ひつゞけ。終に忠婢をして其罪を自ら任せんと
 いはしむるに至りては。事意表に出で、おもしろし。

京みやげ

いたいけしたるものあり。張子の顔やぬりちご。ま、しやむすびに笠むすび。山
 しふむすびに風車。毒草にやどる山がら。くるみにふける友鳥。虎またらのゑの
 ころ。おきやがり小法師ふり鼓。手鞠や躍るまり小弓。
 いたいけしたる……可愛らしきの意。○張子の顔……紙製人形の顔ふる

べし。○ぬりちご……是も胡粉べにあごをぬりたる人形なるべし。○し、
 しやむすび……笠むすび……山しふむすび……紐の結びいたの名。裝飾
 品に使ふものふるべし。○ゑのころ……大の子なり。虎またらは毛の種類。○
 踊るまり小弓……鞠の踊るやうに出来たるものご小弓ご二品をいへるに
 や。

杉の木

ついで立つたは杉の木。かいうたは松の木。松のえだの下りえだが。あちへちへ
 すぢりもちり。もちつたる中に。藤の花がたよ、と。咲き亂れてきり、と
 廻はつて。はひか、つたが面白いとの。
 かいうたは……屈んだはふり。

人うれひある時。一たび此曲を吟せば心おのづから浮き立つべく。満胸の不

平もどこへの消滅すべし。淡泊にして罪なき曲の功用。なんぞ夫れ軽々しく見るべけんや。

春雨

春雨にさす傘の柄もりして。腕まくりして空見て。日はおどやるる。まよぼこのれたもよいものを。かまへてほさいで好い日にも。

日はおどやるる……日輪はましますかの意。○かまへて……まつと乾きいでもの意。○好い日にも……日にもほさいで好いの意に轉倒して見るべし。

雨にぬれたもよいもの悟る。世間何事か樂しみの種とふらざらん。作者の風流おもふべし。當時の歌曲となふべし。

番匠屋

番匠屋の娘子のめしたりや帷子。肩に番匠箱腰に小鑿小ぢよんの。細粧やのこざり。忘れたりご墨さし。裾にかんなくつ吹きや散らせた。わぢよに名残は惜しけれどもよ。背戸やうらのごまり船がいにくほどにの。ほうい。やがてこうぞよ。

小ぢよんの……小手芥なり。○わぢよ……和女あり。向ふの女をさして呼ぶ詞。○背戸やうらの……家の裏口の方を背戸といひ又海路の狭き處を瀬戸といふ。故に家の背戸と海の浦とをついけしなり。

むしろ意味ふき曲というても可ならん。而して其詞の雅ふる其詞の優ふる。おぼえず人をして言外の想像を喚起せしむ。此に於て意味なき曲も多情と爲り多趣と爲り來れり。いはゆる味はずして真味を知りがなきものか。

住吉

爰は住吉のお前で御ざる。いざや人々宮めぐりを始めて。神をすゝしめの御酒ま
ぬらせう。ふふかた。松のひまより海づらを見れば。霧にまじはる淡路の島山。漕
ぎ来る船はおもしろや。ふなかた。

ふふかた……舟人を呼び出すやうにいひて實は調を添ふるための詞。

神拜ことをはりて酒まつめぐる。何ぞ歌はざるを得ん。既にうたふ。何ぞ舞
はざるを得ん。老松縁深き處に誰か此曲を作りて神慮を慰め奉れる。

第四種 盆踊歌

後水尾天皇の御時に集めおかせ給ひしといひつたふる諸國の盆踊歌。世に疾
りて一卷あり。古雅ふるもの多く。此時代の歌曲を補ひ。且つ民間に行はれ
し唱歌を代表する價値十分ふりと信するを以て。こゝに之を擧ぐるあり。

(山城)

おや子妻とも田を植ゑしまひ。神に千歳の種を待つ。

僅に二十八字。よく一家親睦の情を寫し出させり。

(大和)

若いをなごの願かけるのは。神や佛もをかしかる。

人の前に言はれぬ事を神佛に對し願ふものあり。此うたを讀んで成むる處
ふからんや。

(同國)

花は一枝折りては二人。わしはどちらへなびいやら。

戀の歌も斯く優美にいへばいはるゝものよ。

(河内)

山家々々どあしげにいやる。色のよい花山にさく。

野に遺賢あり。山がつと人はいへども時鳥まづ初聲は我のみを聞く。の古歌に似て感慨さらに深し。

(同國)

人がいひますこなたの事を。梅や櫻のとりどりに。

名譽花の如し。その歌はるゝ人は。美人か才子か將た政治家か。

(同國)

面白いぞや今さく花は。後の散りばは知らねども。

今日を知つて明日を知らざるは世人の常。目前の榮花は現在の春色。

(同國)

鐘が鳴るかよ鐘木がなるか。鐘と志ゆもくのあひが鳴る。

天下なと是れ。人事みふ是れ。

(和泉)

夫たがへず娘はかせぐ。妻はせごへ出て米がしぐ。

おのゝ其業に安んじて倦まず。今夕團樂の快樂はたして幾はくぞ。

(攝津)

今年世がようて總に總がさいて。このも百姓もうれしかる。

豊年の曲おのづから此くの如くならんこそ農夫の自然なれ。世の唱歌に従事するもの省みる處なからずやは。

(同國)

山を通ればいはらがとめる。いはら離しやれ日が暮れる。

小兒の喜びそうな曲ふり。かく求めずして興を得んこそ歌の趣意ふれ。

(同國)

人をつかはし川の瀬を見やれ。浅い瀬にこそ葉がとまる。

まさに是れ當時相應の修身唱歌さすがに古代のものは違つたもの。何が。理屈めかすして優美なる處が。

(伊勢)

掛けてよいのは衣桁に小袖かけてたもるふ薄情。

近きものを引きて傍例とす。どこそこふく雅趣あり。

(同國)

駒のやせたに高荷をつけて。是でおり扱ふ鈴鹿の山を。しかも月夜が暗の夜に。

慈愛かくの如し。馬もし心あらば主人の爲めに身をも惜まどこやいふらん。

(遠江)

遠州濱松ひろいようで狭い。横に車が二丁なゝね。

廣いと思ふは生國ふればなり。狭いと思ひたるは實證を得たればあり。かかる事こそ世には多けれ。

(甲斐)

高い山から谷そこ見れば。おまんかいや、布さらす。
貧民を憐れむ心おのづから起らん。良家の少女をして此歌を吟せしめなきもの。

(相模)

夫は萱かり鎌倉山へ。我は子供に根芹摘む。
おのゝ其業に苦しむも子の愛あればなり。根芹を摘むの句。何等の深情ぞ。

(丹後)

丹波田處よい木どころ。娘やりたや聲ほしや。

鼓遣火の烟おこるどころ。夕顔棚を隔て、老人夫婦の閑話を聞く心地す。

(石見)

これの親方はんどやうなざる。奥は琴の音中の間は鼓。門はものもが絶えませぬ。

和氣洋々として内外に溢る。是れ一郷をして其榮華を歌はしむるゆゑん。

(美作)

近江の笠はなりがようて着ようて。志め緒が長うて着よう御どる。
歌ふ時にも農夫の要具を忘れずして之を稱美す。おのづから泰平の民たるを證すべし。

(紀伊)

山が焼けるが立たぬが雉子よ。是が立たりよか子をおいで。
人問ひ雉子答ふ。こゝろく情あらぬはあじ。二十八字の歌にして豊富の
くの如くふるは稀に見るこゝろ。

(淡路)

舟がつくく二百二十七艘。まが御さるかあの中に。
待つ舟きたれり。歡喜の澤まづ歌さふりて響く「つくく」こいひ「百二十七」
といふ文字。うれしとの溢れたるを見るべし。

(讃波)

志波はよい町西北をうけ。八島おろしはそよく。

わが住む土地を愛するこゝろ。青嵐と共に薫りわたるを覺ゆ。

(伊豫)

わしは濱松寐入るとすれば。磯の小波がゆりおこす。
比喻味ふべく風調愛すべし。

(肥前)

平戸小瀬戸から舟が三ぞう見ゆる。丸にやの字の帆が見ゆる。
畫も及ばぬ真景。文も能はぬ情味。

第五種 琴唄

琴唄に二種あり。一つは起原を今様に取りて其口調に組み立てられたるもの。一つは謠曲などより轉り來りて句法に變化おほきもの。是なり。今に擧げんとするは甲種の方。いはゆる組唄と稱ふるものにて。他の乙種は次の時代に属するものなるを心得おくべし。

ふき

其一

ふきといふも草の名。茗荷といふも草の名。富貴自在徳ありて。冥加あらせ給へや。

其二

春の花の金玉。和風樂に柳花苑。りうくわゑんの鶯は。同一曲をさへづる。

其三

月のまへのしらべは。夜寒を告ぐる秋風。雲井の雁がねは。琴柱におつるこゑいふ。

其四

長生殿のうちには。春秋を富めり。不老門の前には。月のかけ遅し。

其五

弘徽殿のほそごのにな。ちむは誰々。臘月夜の内侍のかみ。光る源氏の大將。

其六

たそやこの夜中に。さいたる門をたたくは。たたくともよも明けど。宵の約束あければ。

其七

七尺の屏風も。をどらばふどか越えどらん。羅綾の袂も。引かばふどかきれどらん。

琴唄は力つよく味あふれたるを以て長するに非ず。やさしく美しく調へよきを以て長するなり。吟下試みふは其深窓少女の専にする聲たるを知らん。

其一……草の中に我欲する富貴冥加の名あるをいひて日出度き曲とせしなり。

其二……○秋風樂……柳花苑……共に雅樂の曲名。たゞし和風は花風と同音なれば花の意をこめたるならん。

其三……○月の前の……調への物あはれなるさまを秋風にたとへたり。○雲井の……琴柱を斜に立て並べたるを雁の群れ飛ぶさまに見立てしなり。

其四……○朗詠集に。長生殿裏春秋富。不老門前日月遅とあるを用ひて作れり。長生不老共に支那古代の内裏にあり。

其五……源氏物語花の宴の巻のことを作れるなり。

其六……明かふるへし。

其七……判断始皇を刺さんとする時のことを。燕太子といふ小説より譯せる一段なり。然れども前に源氏臘月夜密會のことをいひ。次に輕卒かくの如くふるまひきを戒めて宵の約束ふければといひ。終に始皇の勢を以てせば七尺の屏風も羅綾の袂も物ふらうといひて。唯精神一到にある事を説けるが如し。男女の間を借りていふは歌曲の常。而して作者の主旨は或は外にあるかも知られず。

須磨

其一

須磨といふも浦の名。明石といふも浦の名。更科の月とも。ふがめていとや明か

さん。

其二

春にふせし心も。いつしか秋にうつろふ。黒木赤木のませの内に。ふじあゝる花の色。

其三

きりくす夜すがら。何を恨みすたくぞ。我も思ひに堪へかねて。いごい心のみだるゝに。

其四

中々に人をば。恨むまじや恨みど。どにかくに敷ならぬ。うき身の程ぞかふしき。

其五

三五夜中の新月。くまなきぞ面白や。千里の外の人までも。さぞやながめ明かさん。

其六

深更に月さえて。車のおこの聞ゆるは。五條あなりのあはら屋の。夕顔をしるべに。

月を賞するより時候變遷の速ふるを感ず。秋のあはれは春となり恨ごふり。一轉して遠人を思ふ戀ごふり。終に源氏物語夕顔の巻を引きて古も今も人情のかはらざるを述べて收結せり。順序ごとのひて少しも亂れず。

(四) 近世の歌曲

(徳川時代より今日に及ぶもの。いはゆる彈物歌曲時代)

第一種 俗曲

曰く琴唄(前に謂はゆる三種)曰く長唄。曰く端唄。曰く何節。曰く何唄と。俗

曲に種類おほけれども。それは歌ふ節の流沁に属するものにて。文學上の歌曲として取り調ぶる方に必要は少なきのみならず。其用語法等は互に相類似するものたるを免かれず。故にこゝには俗曲と概稱して琴三味線にて彈せらるゝ歌曲を擧げんとす。

み山おろし

みやまおろしの小篠の葉の。さらりさらり。とさなる心いそよけれ。けはじき山のつらなりの。かなたへまはりこなたへまはり。くるりくるり。とさなる心は面白や。

狂言小歌の面影あり。一たび吟せば塵世も忘れはつべし。

京鹿の子

其一

これは京鹿の子色もよや。めゆひ手際もよや着よや。あら都いひしやのう。みやのきてなら戀しやのう。

其二

これは京小袖色もよや。紋びら手際もよやきよや。あら都いひしやのう。みやの染殿いひしやのう。

めゆひ……絞りのこと。○着よや……着具合のよきをいふ。○してなら……鹿の子染の製造人をいふ。○そもこの……染物つくるための建物をいふ。その物を愛するよりその産地を愛するに至るは人情の常。死んや何につけても戀ひ慕ふ都ふるをや。

てうすびめ

朝間あさひごとく起きててうすがめを見れば。わが置かぬ花のあるもふしぎやな。

てうすがめは手水瓶にて今いふ手水鉢あるべし。それに我知らぬ花のさしてあるは情ある人のひそかに贈れるにや有らん。菊か女郎花か。あらやさしの意中の人や。

山がら

山がらが籠の内での恨み。か。か。か。小籠でも。んどりうたれぬ。

比喩的の文字。おもしろし。

花と雪とは

花と雪とは。どれが吉野のながめやら。どゆうやらかうやらわきて。いろわかちあふ。どれがよし野の詠めやら。花やら雪やらわきて。

三十一字の及ばぬ風情あり。

あれてやさしき

其一

あれてやさしき伏見の里の。雪に雪降る。呉竹の。折れそ。うな。雪に。雪ふる。呉竹の。折れそ。うな。

其二

刈らばとく刈れ淀野のまこも。かれは月影がまたにすむ。そこにすむ。刈れば刈れ月影がまたにすむ。そこにすむ。

竹を惜みて雪を厭ふも愛。月を親しみて葎を疎んするも愛。愛の聲發して歌と爲る。何ものか優美の幕に蔽はれざらん。

まつねん

こんど長崎で。變はつた小歌を習うた。あんなきは覺えないが。中の習歌を忘れた。どこかあるべいとて。書いてもらつたが。それをへ出口で落した。これ面目ない。首尾もまよわけも此とほり。これめんぼくない。

罪ふきおどけ頗る興あり。かの宵寐して朝寐を好む晝寐坊をりく起きて居眠をする」にも中々おとらず。

八千代志

いつまでもかはらぬ御代に合竹の世々はいく千代八千代ふる。雪ぞかゝれる松の二葉に。雪ぞかゝれる松のふたはに。

古風を失はざるは祝言の特色。

わしが在所は

わしが在所は。京の田舎の片ほごり。八瀬や大原に牛ひいて。柴打盤に、床几頭へちよいと乗せて。黒木買はんせんかいな。栗かばしやんせんかいな。えい、い、い、かばしやんせんかいな。

秋風柴を吹いて大原女の歌こだまに響き来る。雅中の雅。美中の美。

つくろひは

つくろひはふけれど。どこか尾花草。露を含めるまほらしき。月に光りを増すわいな。淡味かへつて濃味にまさる。死んや色ふき月の之を装ふあるをや。

綱は上意を

綱は上意を蒙りて。羅生門にぞ着きにける。折しも雨風はげしきうしろより。兜

のしころを引つつかみ。引き戻さんといひ引く。綱もきこえし兵にて。かのく
せ者に諸手をかけ。よしやれ離しやれ鏡がされる。しころ切れるは厭ひはせぬ
が。なつた今結うた鬢の毛が損じるは。七つ過ぎには行かねばふらぬ。そい
へ行かんすが。こちや氣にかゝる。誰いやく。鬼いやく。鬼もしころもな
つちもいらぬい。こつと持つてけよつてけ。

變化の妙おもはず人をして失笑せしむ。そこへゆかんすがは鬼ふるもの、
詞にして。誰トやより又綱の詞となる。ふつちもは何もといふに同じ。

異見曾我

春雨に障子明くれば南に。梅に鶯たはぶれて。羽風は花の散るふせい。是や二月
の雪ふらん。あれく御覽候へ。少將五郎が手をとりて。御身様とみづからは。
鶯宿梅の契りぞや。其つれをまうせしも。げにもろこしの東坡居士。樂しむ

人の言葉にも。一夜を千夜といはんした。唐にも粹の有るものを。十郎様の志ほ
らしき。さぶり又は扇の手。にくみたうてもにくまれぬ。ちと兄様の風俗を見
習ひ給へ五郎さん。疊ごはりの其あらき。いつぞや和田の大よせに。障子破り
三方をみぢんになして仁王立。その折からの御一座は。皆御一家の事なれば。あ
とは笑ひになりしかど。ほめた事では御せんせぬ。只何事も。本望達し給ふ
まで。虫を志なして居給へや。たしなみ給へとありければ。さすがにたけき時致
も。少將が黒髪に。つなぐれながら。勝枕。毛抜出だしてをがみぬる。

二月の雪……朗詠集中の句を引きていふ。○一夜を千夜と……春宵一刻値
千金の詩を和らげて引けるあるべし。○さぶり……酒の飲みぶりといふ
事。○少將の黒髪に……女の髪の毛にて作れる綱には大象も繋がる、といふ
事つれく草にあり。

謡曲には元服曾我調伏曾我小袖曾我夜討曾我禪師曾我など多し。それに似

て似も附かざるものを作れる作者の手際こそエミなれ。

第二種 俚謠

楽器の助ふしに謠はるゝ里俗の歌曲。すなはち婦女子にあつては手鞠唄の如き。農婦にあつては田植唄の如きものを擧げんとするあり。然れども此種類には全篇を貫きたる意味の面白きといふよりも、毎句變化の自在ふるゝ口調の流滑自然ふるゝを以て感心せらるゝもの多きは、一二曲に就きて大概は他のものを推し量りつべきなり。請ふ此俚謠を讀む人々は、興味を理屈の外に求めて心耳を童幼子女の境界に置くあらば、思半に過ぎん。而して其自然の言語と自然の曲調とは、寧ろ罪なく飾ふき童幼子女の中に發見せらるべきものぞ。

手鞠唄(東京邊)

ほうほけきよや鶯や。なま〜都へ上るこて。一夜の宿をかりかねて。梅の小枝に晝寐して。朝から晩まで夢を見た。枕の下から文が出た。お千代に來いこて文が出た。お千代をやるには金が入る。かん〜かんごしきしてやる。きん〜着物なをさせてやれ。道でころぶふつまつくふ。お馬が來たらは脇によれ。おかごが來たらはおどぎまる。熊野の道で日が暮れて。今夜はどこへ泊らうか。おぢいこの宿に泊らうか。おぢいこの宿には蛇が居る。おばいこの宿に泊らうか。おばいこの宿には猫が居る。蛇じやないもの。繩じやないもの。猫じやないもの。ひくい所にひき蛙。高い所に竹の子。海の中のことそ有。まつ〜一貫かしました。千せんせん萬せんせん。

「かん〜かんごしき」といひ「きん〜きん〜きん」といひ。同音の詞を前に添へていふは俚謠一種の手段にて面白し。○「お馬が來たらは」といひ「おかごが來た

らば「どいひ。對句の如き句法を用ふるは是も俚語の常にて。實は遠く上古の歌文より來り。近く宴曲諸曲等より來れる裝飾法。次の「おぢ、」「おば、」と二句づゝに分けいひて。「蛇」やふいもの「猫」やふいもの「と自問自答の如くいへるも同句法ながら。殊に其力あるを覺ゆるは後者にあり。今の新体詩を作る人々。これらの句法に熟しなば。自然にして面白きいひのたも得らるべし。死んや兒童に謠はしむる唱歌の作においてをや。○「ひくい所にひきがへる」たかい所にたけの子」と同音の文字を重ねいへるは古雅ふるを覺ゆ。

同 (九州)

手鞠と手鞠といきあうて。中の手鞠のいうやうにや。おとつさんおつかさん起きなんせ。起きてまゝ、食て紅つけて。権現お寺にみやろうや。ごんげんおてらは何事や。よんべこらいた花嫁子。おツくの座敷にふはらせて。さんの小袖を縫は

すれば。涙ほろ／＼お泣きやる。私が弟の千松が。七つ八つから金堀に。金はふかやら死んだやら。一年待てどもまだ見えぬ。二年までどもまだ見えぬ。三年三月に狀が來た。狀の上書よんで見せや。お駒にこよというて來た。お駒はやられぬこせんやろ。こせんに何がふ着せてやろ。下からもんめん長小袖。上から越後のお帷子。おかなびら。

みやろうや……參らうやの訛りにや。○こらいた……來られたなるべし
○なはらせて……直らせてか。○さんの小袖……絹のなるへし。○金堀に……
……おきたりの意。略語を用ひて力あるは却りて正則の歌よりも俗曲俚語
にあり。○金はなかわら……掘り出す金の無いのやらの意。○何がな……
鉢木の謠に「何をがふ火にないて」ふごあるに同じく古雅なる詞なり。○も
んめん……木綿ふり。○方言なまりのまゝを用ひし處に却りて古雅ふる
處も見え。自在の空氣も呼吸せられて妙味いはん方ふし。

盆唄(東京邊)

ぼん／＼盆の十六日にお閻魔様へまゐるとしたら。珠敷の緒が切れて。鼻緒が切れて。南無釋迦如來手で拜む。手でも拜む足でも拜む。あしたは嫁子のしなれ草。しなれた草をやぐらに積んで。下から見ればぼけの花。ぼけの花。ぼけたく／＼どこまでぼけた。一の丸として二の丸として。三の丸さきに。堀井戸あつて。釣瓶はこがね。こがねの先にさんぼがまつて。それ飛べさんぼやれ飛べさんぼ。飛ばふきや羽ねをきり／＼す。切籠の燈籠はごふたの細工。昏わかいしおのお手細工。おてさいく。

「ぼけの花ぼけたく／＼それ／＼さんぼ／＼きり／＼すきり／＼」ふどのいひかなは謂はゆるしりとり文句にて。而して卑俗ならぬところに面白みあり。「こばなきや羽ねを」といひて「切る」を「きり／＼す」にいひかけたるも輕妙。

ふり。こにもかくにも求めず作らする處に。評すべからざる趣味のある事を發見せらるべし。

子守唄(美濃)

ねんねんやあころ／＼やあ。ねんねのもりはごいた。あの山こいて里いた。里のみやげに何もろた。でん／＼太鼓に笙の笛。それをもらうてなんにする。ふんにするがの富士の山。富士の山ぼごそだつかい。ねん／＼ころ／＼ねんねじよう。力を費やさずして希望と祝言を述べ。おのづからの佳調。

盆踊唄(相模)

揃つたく／＼踊子が揃つた。稻の出穂よりやまだ揃つた。踊をどる子に酸醬あげよ。赤いのびよい青いのびよい。同じくならば赤い。

のを。赤いのを。
踊の中へ水かけられて、手ぬぐひぬらす。鼻紙ぬらす。おん紫の帯ぬらす。おびぬらす。

淡泊にして古雅あり。催馬樂の餘風とや評せん。

田植唄(美濃)

めでた〜の若松様よ。鶴が御門に葉をかけた。なというてかけた。お家繁昌と
いうてかけた。

金の茶釜が内にもあると。いふやつは土瓶のかけもない。

一つは祝言。一つは諷刺。共に古雅ふるを味はふべきは前の曲に劣らず。

日挽唄(同國)

其一

おまへさんのお澤はよう立つた澤。ふるてんのんだかおぐひすのんだか。なるて
んのみやせん。おぐひすのみやせん。しんから。しんから。立ちますな。ほいしよ。こ
りやきた。

なるてん……南天なるべし。其實を吞めば美澤になるといふ謔あるにや。○
おぐひす……鶯あり。是は美音の鳥ふればそれを吞んだかの意。○ふるて
んのみやせん……南天吞みはせぬふり。○しんからしんから……真から根
からなり。

農婦の歌は此くの如く簡單あるこそ自然ふれ。おもしろし〜。

其二

うたへおどおろく聲はりあげて。七つ館にひやくほど。七つやかたに及びもふ

いかにせめて此世にひびくほび。

おどめろく……十六の娘といふ意にや。なほ自然の妙味は前の曲の下にあらず。かれも自然、これも自然。すべて此自然を以て俚語の特色とせば思半に過ぎん。味ふべし味はよざるべからず。

歌曲評註

明治廿六年七月十五日印刷發行

定價金拾五錢

明治廿五年十二月三日内務省許可

編輯兼
發行人

大橋新太郎

日本橋區本町三丁目八番地

印刷者

近藤圭造

麹町區飯田町五丁目廿六番地

印刷所

近藤活版所

麹町區飯田町五丁目廿六番地



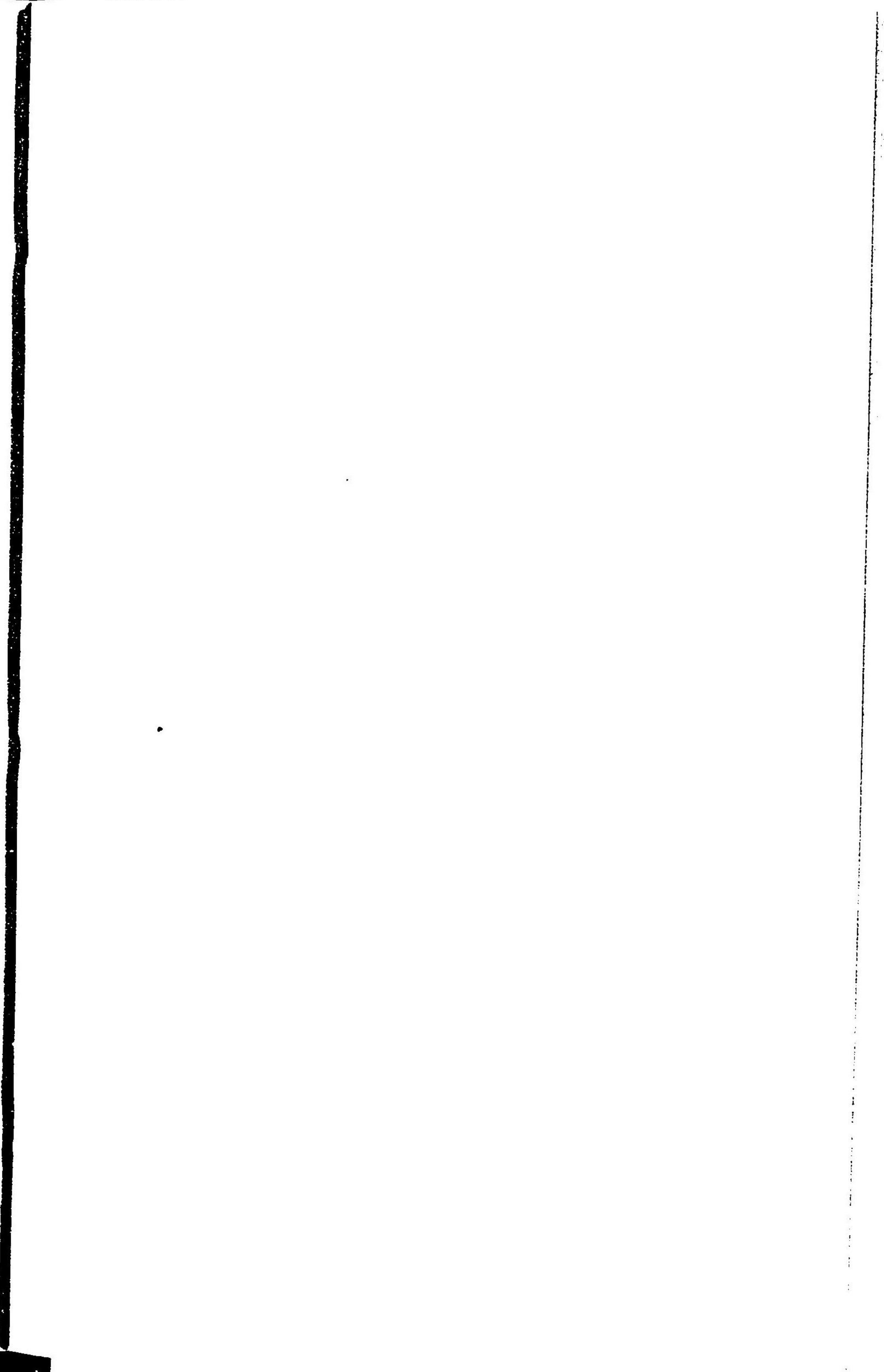
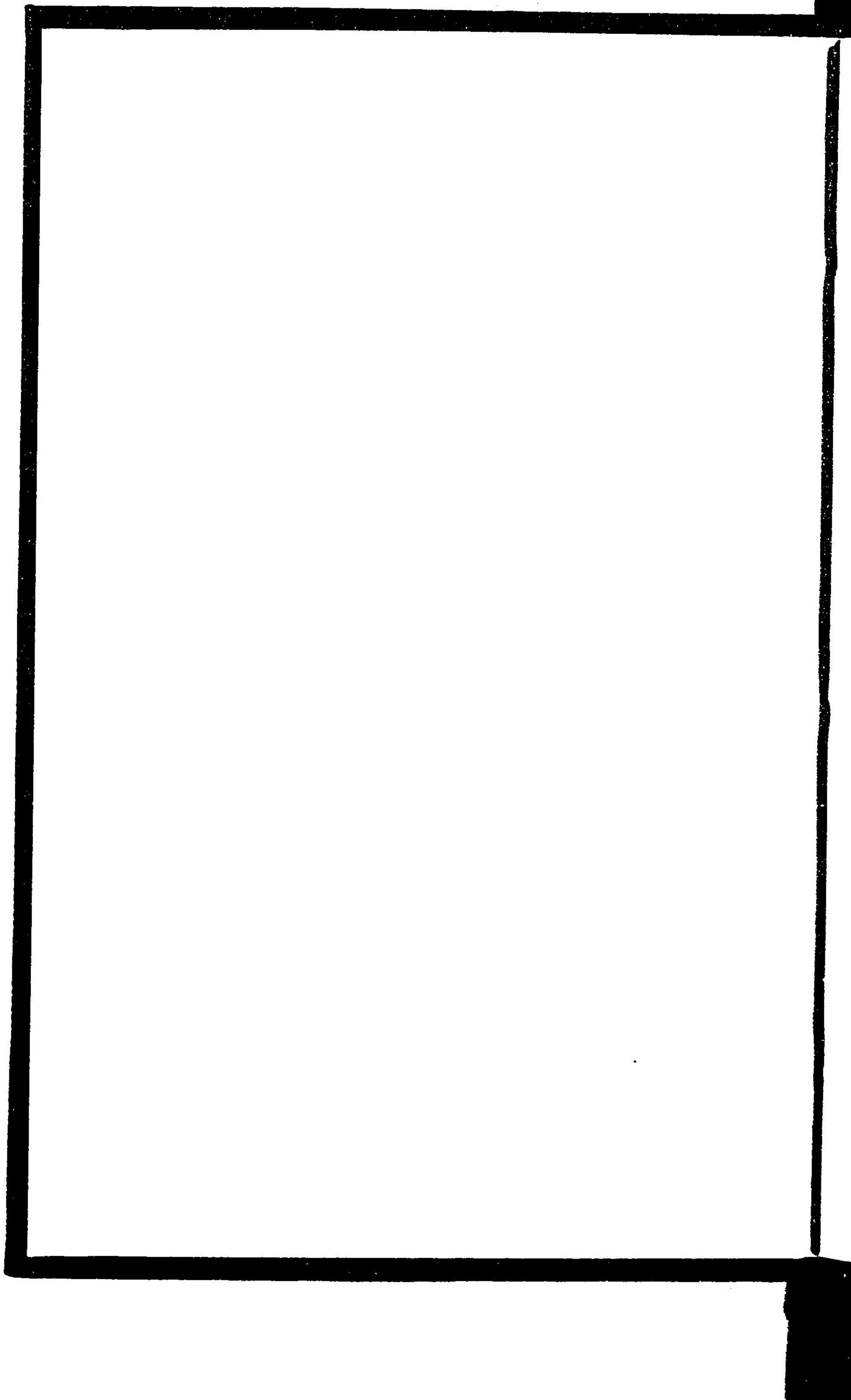
東京日本橋區本町三丁目

發兌書林

博

文

館



1000

43
194

088147-000-9

43-194

歌曲評註

大和田 建樹/著

M26

DBH-0004



